凡人に誇り高き烏が入りました

班斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
凡人に誇り高き烏が入りました

【Ｎコード】
Ｎ２９２６Ｗ

【作者名】
班斗

【あらすじ】
関ヶ原の戦いで雑賀孫市は命を落とした。
彼女の魂は時を経て、別世界に転生する。

この小説は魔法少女リリカルなのはと戦国ＢＡＳＡＲＡ３とのクロス小説です。
時折、オリ設定とオリキャラが出る場合があります。
それらが苦手な方はお引き取りください。
また、この作品は著者の処女作です。

文章的に拙いですので生暖かい目で見守ってくれたら幸いです。

第零話　序章一

時は慶長五年九月一五日。

陽(ひかり)と陰(やみ)が交わる地、関ヶ原において天下分け目の戦が行われようとしていた。

絆の力で天下を治めんとする東軍総大将「東照権現」徳川家康。

家康を豊臣秀吉の仇として討たんとする西軍総大将「君子殉凶」石田三成。

この両雄の激突は圧倒的な武力を誇る西軍の有利に進む。

そんな戦の最中、戦国最強の鉄砲傭兵集団雑賀衆が頭領「煙鳥翔華」雑賀孫市は東軍の本陣にいた。

「孫市、今の所我が軍は少々不利な状況だ。そこで内応策にでる」

「内応策……小早川を味方に引き入れるか？」

「無明秋夜」小早川秀秋は豊臣秀吉の義甥であるが些か、いや極めて気弱で優柔不断な性格であり、三成に脅迫されて嫌々従っていた。

家康はそんな秀秋の状況を読み、内応策に出たのである。

「ああ、金吾は三成に嫌々従っているようだ。すでにこちらの味方になるという書状は受け取っているがこの不利な状況では優柔不断な金吾の事だ確実に迷っているだろう。そこで……」

「我らが松尾山へと銃撃を行い、小早川の裏切りを促すか？」

「そうだ、金吾が味方になればこの不利な状況も覆せる……頼めるか孫市」

孫市は考える。

この策が成れば東軍の勝利は確実のものとなるだろう。

それはつまりこの戦の勝敗を我らに委ねるという事だ。

我らは我らを最も評価する者と契約する。

これは徳川からの最大の評価だと考えてもいいだろう。

「わかった。その任、快く受けよう」

孫市は振り向き様に叫ぶ。

「いくぞ！　我ら誇り高き雑賀衆！　我らの働きでこの戦に勝利をもたらす！！」

一方、その頃松尾山では……

「はあ……まだ戦終わらないのかなぁ……早く原山海雄（はらやまうみお）先生主催の戦国美食会の会合に行きたいなぁ」

戦国一の優柔不断と名高い小早川秀秋は未だ終わらない戦に憂鬱な気分だった。

そして目の前の焚き火には山の幸がふんだんに入った美味しそうな鍋がぐつぐつと煮立っている。

「やっぱり秋は鍋だよねぇ！　勿論、春も夏も冬もだけど……この鍋時間が僕の一番の幸せだよぉ！」

この男は皆が身命を賭して戦っている最中、一人呑気に鍋を食していた。

はふはふと熱々の鍋を汗を垂らしながらも平らげていく秀秋の顔は幸せの絶頂のようだ。

だがその幸せな鍋時間ももうすぐ終わりを告げようとしている。

孫市率いる銃撃隊が松尾山へと迫りつつあったのだ。

そして一発の銃声が鳴り響いた。

「ん？　……あっ、あちっあちぃーーー！！」

放たれた弾丸は見事に秀秋の鍋へと命中し熱々の中身が秀秋に降り注いだ。

突然の悲劇に混乱の極みに達する秀秋……哀れな……

「ななな、何事ーーー！！」

次々に放たれる銃撃に小早川軍は大混乱に陥った。

だが更にそれを助長しているのは他でもない大将の秀秋である。

「わわわ……徳川軍からの銃撃……敵は家康さん！　いや、味方になるって書状送ったし……なら敵は三成君！　……は怖いし……あぁ、天海様ーどうすれば？　……あれ？天海様？　……何処に行ったの天海様ぁ！？」

秀秋の傍らに立つ正体不明な謎の高僧「慈眼傍観」天海はこの場に

はいなかった。

彼の言葉を求める秀秋は周囲を見渡すがその不気味ともいえる雰囲気を纏う、かの僧の姿は何処にもない。

そして、とうとう慌てふためく秀秋の頬に一発の弾丸が掠めた。

つぅと頬を流れる血で冷静さを……

「みっ、三成軍だよ！　早く三成軍に攻撃して！！　うわっ……うわぁ助けてぇー！」

取り戻せなかった秀秋は散々に銃撃に晒され、遂に三成軍への攻撃を指示したのだった。

「天海様ぁ、たーすーけーてー！」

その頃、小早川軍の陣地から少し離れた山中で……

「ふっふっふ……すみませんねぇ金吾さん……私は少しやる事が出来たので退散する事にしました。まあ、誰にも言ってませんがねぇ……」

謎の怪僧天海がこう呟いていた。

「さあ……もうすぐですよ。もうすぐ貴方に会えます……信長公！！」

その後、天海の姿を見たものはいない……

孫市は必勝の策を成功させた。

松尾山への銃撃は小早川に裏切りを決意させ、その結果東軍が圧倒的有利となりもはや西軍の勝ちはなくなったと言えるだろう。

だがその事実は三成にとってどうでもよかった。

彼の目的は始めから家康の命。

戦の勝敗など関係ない、ただ家康を殺せれば三成にとっては勝利なのである。

西軍本陣へと乗り込んだ家康と孫市は石田三成と彼に付く参謀「寥星跋扈」大谷吉継と対峙していた。

「家康ぅ！　ようやくだ。ようやく貴様の首を秀吉様に捧げる時が

来た。秀吉様、許可を……この大罪人を斬首に処する許可を私に……」

「三成！　もうやめろ。もう勝負は着いた。この戦、ワシの勝ちだ……」

「黙れ！　戦の勝敗などどうでもいい……家康、貴様は黙って私に惨滅されろ！」

「三成……分かった。決着を着けよう。孫市、悪いが下がっててくれ」

「刑部、下がれ！　家康の処刑など私一人の手で事足りる」

両軍の総大将はその胸に宿る様々な思いを己が武器に乗せ、ついに決闘を開始した。

そこから少し離れた場所で二人の英雄が激しく火花を散らし激突する様子を背に孫市は口を開く。

「大谷、加勢しなくともいいのか……徳川を倒すことがお前達の目的だろう？」

「ひっひっひっ……主もなかなか非道い事を言う。ああなった三成に近づけば我も斬られよう……それにそれは三成の目的だ。我の望みはまた違うものよ……」

重い病に冒され、全身を包帯で包まれた異形の武将大谷吉継。
彼から立ち上る凶々しく暗い気配が気になり孫市は尋ねる。

「そうか、興味はないが一応聞いておこう。大谷、お前の望みとはなんだ？」

「我の望み……ひひっ、それはな全ての人間に等しく不幸を振りまく事よ……我は人が不幸に成り逝く様が見たい……」

「ほう、それはそれは……一つ聞く」

「何か？」

「全ての人間と言ったな……それは私もか？」

「然り」

「徳川もか？」

「然り」

「大谷、お前自身もか？」

「然り。我もだ」

「では最後に……石田もか？」

「……！？　三成……三成は……」

最後の問いに明らかな動揺を示す吉継の姿を見て孫市はよく見なければ分からないほどの笑みをこぼした。

「大谷……お前もなかなかのからすだな。自身の望みと思いの差に気付かないとは」

「望みと思いの差……だと？」

「そうだ。全ての人間に不幸を……これは紛れもないお前の本心だ。だがお前は無意識にも石田は……石田だけは大切な存在だと思っていた」

「……」

「徳川曰く、それは「絆」と言うそうだ」

絆。

それは家康が胸に掲げ、声にして叫び、それをもって天下を治めようとする程のもの。

人と人との繋がり、信頼関係を具現化した力をこの男はたった一人ではあるが持っているのだ。

「だがこれでお前を是が非でも押さえなくてはならなくなった」

孫市はそう言い放ち銃を構える。

「今はどうやら五分な状況だが、この先石田が不利になればお前は私を押し退けてでも、石田に斬られると分かっていても石田の加勢に向かうだろう」

「……だ……まれ……」

吉継の呪術によって操られる数珠が孫市の周囲を旋回し始める。

お互いに戦闘態勢に入ったようだ。

「評価には結果で返すのが我らだ。戦の行先を我らに委ねるという最大の評価を与えた者を討死させたとあっては我らの誇りに傷が付く。ふふっ、これも絆か……」

「黙れぇ！　これ以上我を惑わすな鴉がぁ！！」

吉継の叫びと共に数多の数珠が四方八方から孫市へと襲いかかった。

第零話　序章一（後書き）

なのは成分はまだです。

第零話　序章二

決着は着きつつあった。

家康への怒りと憎悪をたぎらせ果敢に攻め立てていた三成だったが絆を信じる心と極限の集中力によって覚醒した家康の敵ではなかった。

家康本人も自身の変化に愕然とした。

なぜなら相手の動きが極端に遅く見えるのだ。

それなのに自身の動きはいつもと変わらない。

いや、むしろ切れが増している。

それは数多の武士の中でも極一部の限られた者でしか到達できない武の頂。

無我の境地、後に戦刻ブーストと呼ばれるものだった。

人の体には普段は脳によって制限がかけられており三割程度の力しか発揮できないようになっている。

しかし無我の境地に入るとこの制限が外れ十全の力を発揮できるようになる。

その結果、時間の流れが遅く感じる程の思考加速とその中でも普段以上の動きが出来る程の身体能力を得るのである。

無論、危険も存在する。
人体に制限が存在するのはそれがないと危険だからである。
人の体は自身の全力に付き合えるほど頑丈ではない。
制限が外れた状態で長くいるとその強大な力に体が耐えきれず自滅してしまうだろう。
無我の境地は一時的に爆発的な力を得ると同時にそういった危険も背負ってしまう諸刃の剣なのだ。

「い……えやすぅ……家康ぅぅぅぅぅ！！」
「これで終わりだ！　三成ぃぃぃぃぃ！！」
刀を地に突き立て渾身の力で斬り上げる「斬滅」を放つ三成。
その一閃は真空波となり直線上のあらゆるものを斬断するほどの威力を持つ。
対して家康が放ったのは最大限までに溜められた「天道突き」。

これは気を拳へと収束させて放つ正拳突きである。

これに三成は勝ったと思った。

しかしその思惑は大きく外れることになる。

通常であれば気で強化された拳であろうと三成の「斬滅」によって拳ごと家康は一刀両断にされていただろう。

だが、家康は気をずっと溜めていた。

そう、無我の境地に入るずっと以前からである。

全身の気を余すことなく拳に込め放たれた「天道突き」は通常の十倍の威力を発揮する。

さしもの三成もこれには驚愕した。

家康を両断するはずの真空波はその拳によって霧散されたのだから。

三成は即座に思考を切り替える。

今の一撃を防がれたのは憤慨だが技後の硬直を狙い「刹那」に「斬首」すれば良い……と。

思考と同時に行動に移る三成だったがふと顔に差した影にその思いは粉々に砕かれた。

三成の憎悪と狂気と驚喜に彩られた瞳に飛び込んできたのは家康の左拳、「天道突き」の二段目だったのだ。

一瞬にして三発。

銃声が一つにしか聞こえない程の連射は吉継の数珠を瞬く間に破壊する。

「グッ……オノレェェェ！！」

吉継の呪詛に満ちた慟哭も柳のように流した孫市は弾の無くなった銃を捨て腿の吊革から新たな銃を抜く。

「どうした大谷、感情的になるとはお前らしくもない。そんなに矛盾を指摘されたのが業腹だったのか？」

普段の冷静沈着な吉継ならばその変幻自在な数珠捌きにさしもの孫市も苦戦を強いられただろう。

だが戦闘を始める前の問答が吉継から冷静さを失わせていたのだ。

結果、感情的になった吉継の数珠は緻密で複雑だった以前の動きはなく粗雑で単調なものとなっていた。

そのようなもの孫市にとっては止まっているも同然である。
一個、また一個と孫市の銃撃によって破壊され、数も残り少なくなっていた。

「不幸ヨサンザメク降リ注ゲ！！」

吉継は残り少ない呪力を尽くし数珠を巨大化させ一斉に孫市に襲いかからせる。
だが……

「舞え！　幾千幾万羽の八咫烏よ！！！」

孫市も奥義を繰り出しそれを迎え撃った。
遙か上空に放り投げられた幾つもの拳銃、散弾銃、機関銃。
それを次々に手に取り繰り出される銃撃は鉄風雷火の限りを尽くす嵐のような個人戦争。
数多の弾丸が暴風雨となり数珠を一つ残らず破壊し尽くす。
これで止めだとばかりに肩に担がれた鉄箱から飛び出した連筒火矢は上空で分散、地上へと降り注ぎ辺り一面を業火と閃熱と爆風に包

み込んだ。

「グゥッ！？　忌々シイ鴉ガ！！」

何とか爆心地から逃れた吉継は全てを呪い殺すかのような瞳を炎の中心に向けた。

「……！！？」

そこに見えたのは業々と燃え盛る炎の中に立ち、すでに狙い済ましたかのように銃を構える孫市と己の命を刈り取るであろう弾丸の姿だった。

「徳川、終わったか……」

三成の亡骸の側でふさぎ込んでいた家康が顔を上げると孫市がこちらに来ているのが分かった。

「孫市……ワシは……」

今にも泣きそうな家康の顔を見て孫市はふと笑みを浮かべる。

「徳川、このからすめ。本当に女々しい奴だなお前は。」

「……ああ、ほんとに女々しいなワシは。今になって様々な思いが胸を締め付ける。何故こんなことになったんだろうとな」

「石田を倒したことを後悔しているのか？」

「……分からない。ただ、三成とは他の道があった気がしてならないんだ。それを後悔と呼ぶのならワシは後悔しているのだろう」

孫市は目を細めじっと家康の顔を見つめた。

様々な感情が入り交じった顔は情けなくも思えるが……

「悪くはないな」

「……？」

「いや、なんでもない」

「そうか……悪いが孫市、三成と二人きりにしてくれないか」

「……分かった」

頭巾をかぶり三成の傍らに座り込む家康から離れた孫市は少し辺りを散策する事にした。

「戦国最強」本多忠勝や「奥州筆頭」伊達政宗といった戦友達や雑賀衆の部下達がこの決着の地に集いつつあり、その者達に労いの言葉を掛けて回るためである。

だが、その為にこの場を離れたことが後の悲劇を生む事をこの時の孫市は知る由もなかった。

恐らく、西軍総大将を下した事で東軍勝利は確定した……その事実が孫市から警戒心をほんの少し取り去ってしまったのだろう。

ふと吉継との激戦地に戻ってきた孫市は些細ながら違和感を覚えた。

それに気付けたのは運によるものだろう。

ただ、それが幸運か不運か孫市本人しか分からないのだが。

孫市が抱いた違和感の正体、それは……

「ッ……大谷はッ！？」

凄まじいまでの嫌な予感に孫市はその場から駆け出し、急ぎ家康の下へと戻る。

瞬間、視界の端で何かが閃いた。

「ぐっ、徳川っ！！」

「？！！」

ふさぎ込むのを止め立ち上がろうとしていた家康を押し退けた孫市はすぐさま閃きの下へと銃弾を撃ち込む。

そこにいたのは全身を血と煤で汚しながらもぎらついた眼でこちらを睨む大谷吉継の姿であった。

「惜しい、惜しかったなぁ。これで三成の仇も……三成……の望みであ……った太……閤の仇も取れ……たものを……ひっひっひっ……」

どさりと音を立て崩れ落ちる吉継を見て、自身の危機を知った家康は感謝の声を挙げようと孫市の方へと振り向き愕然とする。

家康の目に飛び込んできたのは胸から大量の血を流し崩れ落ちる孫市の姿だった。

「ま、孫市ぃーーっ！！」

致命傷だった。

誰がどう見ても致命傷であった。

吉継の放った最後の数珠は孫市の左胸に大きく穴を開けたのだ。

まるで間欠泉のように吹き出す鮮血をその虚ろな瞳で見て、孫市はか細く声を上げた。

「徳川……そんな顔をす……るな。このからすめ……お前は興した夢を……貫く事を決めたのだろう？」

孫市は急ぎながらも後悔にふさぎ込んでいた家康が決意と共に立ち上がるのを見ていた。

人と人との繋がり、絆の力でこの世に平和を作る。

その興した夢を貫こうとする、乱世によって平和というものが霞んでしまったこの世界に昇る気高き太陽の姿を。

「孫市……ああ、ワシはこの夢を最後まで貫く。だから孫市、お前もワシと共に……」

「契約か……ふふっ……分かった……」

孫市は震える手で銃を構え、それを天に向ける。

動作を一つ終えるごとに気が遠くなるがこれは最後までやり遂げなければならない。

家康は孫市を抱き込み、その震える手を支えた。

そして繰り返される三つの銃声。

「我ら……ほ……こり高き……雑賀しゅ……う。只今……より契約の……赤……い鐘を……執行する……」

この地に集いつつあった東軍、雑賀衆の面々はそれを固唾を飲んで見守っている。

「響け！　我ら……が炎の……音を……撃ち鳴らせ！！」

響きわたる赤い鐘の炎の音。ここに契約は成立した。

「我らは……八咫烏……太……陽の……使いだ。我ら……は……お前と……いう太……陽に……何処まで……もつい……ていこう」

「ああ、孫市見ていてくれ。このワシが作る平和な世を……ずっと傍で……ずっと……」

もはや流れる涙を隠しもしない家康に孫市は今までで一番の笑みを浮かべた。

「ふふっ……とく……が……わ……やはり……お前は……女……々しいな……」

握られていた銃が孫市の手より地に落ち鈍い音を響かせた。

「孫市……おい、孫市……孫市ぃーーーっ！！！」

八咫烏は天へと飛び立った。

残された太陽はその夢を最期の時まで貫き、以後永きに渡る平和の礎を築く。

だがこの物語はこれで終わりではない。

新たなる物語は時間も世界をも遠く離れた異世界にて幕を開ける。

八咫烏が再び舞い降りる地……その世界の名は……

第零話　序章二（後書き）

次話よりリリカルなのはに入ります。

第一話　太陽の烏（前書き）

ようやくなのは成分入りました

第一話　太陽の烏

使えない奴だ。

静寂を尊ぶべき場所で誰かがそう呟いた。

「航空隊の面汚しめ。犯罪者を捕らえたならまだしも……取り逃がした上にくたばるなど」

それが聞こえた瞬間、少女――ティアナ・ランスターは頭が沸騰した様な気がした。

ティアナは思う。

お前たちは兄の何を知ってその口を開いているのかと。

兄は、ティーダ・ランスターは違法魔導師の人質になった人達を救うために行動した。

命令無視と独断専行の末、結果は命を失う羽目になったが人質に全く被害はなかったのだ。

それは賞されてしかるべき兄の手柄のはずである。

結果と評価は等価であるべきだ。

兄の出した結果に対する評価がこれなのだとしたらあまりにも非道

い。

視線だけを動かし、さっきから兄の誹謗中傷を口にしている奴を探す。

守らなければならない。

思い知らせなければならない。

名誉を、尊厳を、そして誇りを。

何も言えなくなった兄の代わりに！！

「……見つけた」

飛び出そうとした瞬間、誰かに肩を強く掴まれた。

振り解こうと必死に藻掻くが、その腕はまるで万力のようで全くびくともしない。

恨み籠もった眼で振り向くと、そこには知った顔があった。

時空管理局地上本部レジアス・ゲイズ准将。

ティーダが航空隊に配属する前にお世話になっていた元上司に当たる人物だ。

ティアナは兄を通して何度か会ったことがあった。

「気持ちは分かるつもりだ……だが、今は耐えてくれ」

震える声でそう呟いた彼を見てティアナは抵抗を止めた。

「……私は……許すつもりはありません。兄の結果を否定する者も……それを許す管理局も」

「それで構わん。だが、自棄にはなるな。あいつが悲しむぞ」

「……分かりました」

ティアナはそう言って踵を返す。

聞くに耐えない兄への罵詈雑言がひしめくここにはもう一秒たりとも居たくはなかったからだ。

「ランスター、これからどうするつもりだ？」

「さあ……少なくとも管理局に入るという選択肢はないです。あなたに迷惑を掛けるつもりもありません」

レジアスは少し残念そうな表情をしたがすぐに元の威圧と威厳に満ちた仏頂面に戻った。

彼は唯一の身寄りを無くしたティアナを引き取るつもりだったのだ。
別に管理局員になる事を強制するわけではない。
他にしたい事があればとりあえず名前だけは貸そうと考えていた。
内心は局員になって欲しかったがティアナが望みを言えば彼はその援助を惜しまなかっただろう。
だが、ティアナはそれを拒否した。
最早、今のティアナには管理局に属する者は例え兄が懇意にした元上司といえど信用できなったのである。

「そうか……貴様の射撃は奴のそれと比べても謙遜ない程のものだったのだがな」

「……ありがとうございます。ですが……」

「わかっておる。だが、何かあったら儂を頼れ」

「……はい」

こうしてティアナはミッドチルダから姿を消した。

そんな懐かしい夢を見た。

本拠にしている廃ビルの私室のベッドから這い出したティアナはシャワーを浴びるために浴室に向かった。

リズム良く流れ出る湯を頭から浴び、ティアナはさっき見た夢を反芻する。

「我ながら本当に数奇な人生だな……」

そうティアナは口ずさみ、思わず溜め息がこぼれ出た。

理由ははっきりしている。

自身の境遇があまりにも荒唐無稽だからである。

『マスターにとってはある意味二回目の人生ですからね』

首に巻いてあるチョーカーからそんな声が聞こえてきた。

ティアナのデバイスの一つ「ゼフィロス」である。

彼は拳銃型のインテリジェントデバイスであり、亡き兄の唯一の形

見でもある。

現在はティアナをマスターとしており、彼女の良き相棒となっていた。

「そうだな。この記憶も幼い頃はあまり気にならなかったが、成長し、理解できるようになるとどうも引っ張られる」

どうにも老けた気分だ、まだ十五なのにと自嘲気味にティアナは笑った。

そう、ティアナ・ランスターには前世の記憶があった。

それは一瞬だけ浮かぶ蜃気楼のような曖昧なものではない。

前世の自分がどの様に生き、そして死んでいったのか……その全てを記憶していた。

「雑賀孫市……今から約四百年前、第９７管理外世界「地球」の極東の島国「日本」に生きた傭兵集団の長」

『雑賀衆……戦国最強の鉄砲傭兵集団ですか。マスターの射撃の腕も納得できますね』

ティアナは幼い頃より射撃が異様に上手かった。

それは速射と精密射撃に秀で、まるで風のように敵を次々に撃ち落す様から「風のランスター」とまで呼ばれた兄をも超えるほどである。

それもそのはず、ティアナには前世の記憶という反則があったからだ。

雑賀孫市として生きた前世の記憶は普通は得る事の出来ない程の膨大な経験をティアナに与えていたのである。

それは射撃術は勿論の事、徒手戦闘術・剣術・用兵術・サバイバル技術・爆発物や罠の知識等々多岐に渡っていた。

寧ろティアナがこれらの技術を兄に与えたからこそ彼はストライカーと呼ばれるまでに至ったのだ。

「打ち明けられた時の兄の顔は今でも笑えるな」

『それはそうでしょう。目に入れても痛くない大事な妹が突然前世の記憶があるなんて言い出したんですから』

自分には前世の記憶がある。

そう妹に告げられたティーダの驚愕ぶりと焦燥ぶりはかなり酷かった。

何せ本当に猫可愛がりしていた妹が突然前振りもなく変なこと言い出したのである。

どれくらい酷かったというと、夜中にも係わらず、

「俺の大事なティアナが変なこと言い出したーー！！！」

と、大騒ぎするティーダを近所迷惑だという判断の元にティアナが絞め落としたほどだ。

ちなみに、その後ティーダは朝になるまで目覚めることはなかったという。

そんな驚愕の事実を告げられた当初は、半信半疑どころか八割ほど信じていなかったティーダだったが、ティアナがその記憶にある知識及び技術を実際に披露したことで少しずつ信じるようになった。

それを完全に信じたのは自身が最も得意であった射撃で完膚無きまでに負けたときである。

「しかし、例え生まれ変わったとしても誇りは……というか生き様は変えられないものだな」

『前世も今も傭兵稼業ですからねぇ』

「一応、看板は何でも屋なんだが。まあ、戦に生き、戦に死ぬのが我らの……いや、私の生き様だ。今更変えたいなんて微塵も思わない」

『そうですか。ああ、そう言えばレジアス中将からまた依頼が来てますが……』

レジアスが今のティアナの仕事を知ったのは彼女が傭兵を名乗り始めてから二年程してからだった。

最初は止めさせるつもりだったのだがティアナが挙げた戦果や任務成功率を知り、試しに懸賞金が掛けられている違法魔導師の捕縛を依頼したところ驚くべき早さでこれを達成したきた。

以降、彼はティアナにとって一番のお得意様となり、時折こうして依頼をしてくるようになったのである。

「内容は……また懸賞金付きの違法魔導師捕縛依頼か。いい加減、私を頼らずにこれ位はやって欲しいものだが」

『マスターに頼んだほうが早くて安全で確実なんでしょう』

「……まあいい。了解したとメールを送っといてくれ」

『分かりました。では』

ティアナは湯を止め、タオルで体を拭きつつこう告げた。

「ああ、「太陽の烏（ソルレイブン）」……出るぞ」

第二話　再会

太陽の烏（ソル　レイブン）。

四年ほど前に突如としてミッドチルダに現れ、急激に名を揚げ始めたフリーの傭兵である。

二挺拳銃を駆使し、驚異的な精度を誇る精密射撃と魔力炎熱変換による圧倒的な火力で敵を殲滅する事で有名だ。

その存在はミッドチルダにおいても今や知らぬ者はいないとまで言われている程である。

その太陽の烏（ソル　レイブン）ことティアナは現在、情報を得るためにバイクで違法魔導師が潜伏していると思われる地の最寄の陸士部隊に向かっていた。

「魔導師ランク推定ＡＡＡの違法魔導師の捕縛か。中将殿もなかなかきつい仕事を回してくれる」

巧みな運転で公道を飛ばしつつもティアナはそう呟く。

『最高でランクＳの魔導師をものの数分で仕留めたマスターが何を言っているのやら』

それに答えたのは相棒のゼフィロスだ。
かつての戦果を例に出してその呟きに突っ込みを入れた。
「あれは罠で翻弄して余裕を無くした上に超長距離から狙撃しただけだ。直接やり合えばランクＡ程度でしかない私に勝ち目などあるまい」
それがどんなに大変な事か、かつてはティーダのデバイスであったゼフィロスは嫌な程知っている。
それにティアナならば例え直接対峙したとしても軽く殲滅できると思える程、ゼフィロスもこの理不尽な強さを誇る現マスターに毒されてきていた。
『あーはいはい、わかりましたよ……常日頃から戦の勝敗にランクは関係ないとか言ってるくせに』
「……何か言ったか？」
『いえ、別に。それよりもうすぐ目的地の陸士１０８部隊々舎に着きますが』
「まあ、いい。しかし１０８部隊か……私はあそこの狸親父がどうも好かない。声だけは少し惹かれるんだがな」
『確かゲンヤ・ナカジマ三佐でしたか……相当喰えない人物らしい

ですからね。しかし、何故声だけに……』

ゲンヤとティアナの出会いは三年前の第八臨海空港大火災の時まで遡る。

第八臨海空港――それは首都近郊にある比較的大きな空港だった。

しかし、その空港である日突如にして爆発が起き、炎に包まれるという未曾有の大災害が発生したのだ。

その原因は密輸された違法ロストロギアであるとされているが、恐らく出火元であったであろう貨物庫があまりの熱量によりほぼ消滅しており詳細は未だ不明のままである。

しかし何故、この大災害とも言える現場に傭兵であるティアナがいたのか？

実はそれにはこういった理由がある。

常日頃からの地上の人手不足の深刻さと年々悪化する治安の悪さを省みたレジアス中将は傭兵ギルドとの間に協定を結んだのだ。

それは活動を許可する代わりにこういった災害時には傭兵達を臨時戦力として起用するという約定だったのである。

この協定が結ばれた当初は揉めに揉めたが、地上本部が互いの落し所としてギルド特別法を制定し、連携強化のための交流会や合同演習などを進んで行ってきた結果、地上本部は僅かながらでも戦力不足を補うことに成功したのだ。

そしてティアナも傭兵としてはフリーという存在ではあるが、ギルドに所属せずとも身分の登録と届け出は義務である為、この日もレジアスがギルドを通じて出した緊急要請によって災害救助の救援に駆り出されていた。

その先でティアナが指揮下に入ったのが当時災害救助の現場指揮を執っていたゲンヤの下だったのだ。

ちなみにこの日、ティアナに助けられた同じ年頃の少女が長く続く腐れ縁の仲になることを彼女はまだ知らない。

無事に１０８部隊の隊舎に着いたティアナは簡単に受付を済ませ舎内を歩いていた。

しかも案内付きのＶＩＰ待遇である。

「しかし、しばらく見ない間に随分と雰囲気変わりましたね、ティアナさん。」

そう言って案内役を仰せつかったギンガ・ナカジマは隣を歩くティアナの顔を見た。

名前から分かるとおり彼女はこの１０８部隊の部隊長ゲンヤ・ナカジマの娘である。

ティアナとの出会いも先の空港火災の時だ。

妹を捜していたギンガは休暇でたまたま現場にいたとある執務官によって先に救出されていたのだが、その執務官は空港内の安全地と思われる場所にギンガを降ろすと他の要救助者を探しに出てしまった。

そうして一人になってしまったギンガだったが、降ろされた場所が安全とは言い切れなくなってしまい、動こうとした所をティアナが見つけ、無事にゲンヤの所に送り届けられたのだった。

ギンガが探していた妹もすでにティアナによって救出されていたため二人は早々に再会できたのである。

ちなみにその執務官がギンガを回収しようと元の場所に戻ると安全確認した場所が天井の崩落で潰されており相当慌てていたそうな。

「そうか？　恐らく、最近は引っ張られる感覚が強いからだな」

「引っ張られるって何がですか？」

「まあ、主に皺とかだな」

さすがに前世の記憶にとは言えないティアナは苦しく誤魔化した。

「皺……って、ティアナさん私より若いじゃないですか！」

「若いって、一つぐらいしか変わらないだろう。そんなことよりも私は早く情報を貰って仕事に入りたいんだが」

ギンガからの追求を強引に断ち切り、ティアナは仕事の話をし始めた。

こうなったらギンガも仕事の話をせざるを得ないのである。

「あ、はい。資料はすでに用意してますが……その……先にもう一人来てまして」

ギンガの歯切れの悪さに疑問を抱いたティアナはその事を問いかける。

「もう一人？　この仕事は私がレジアス中将から直々に受けた依頼のはずだが」

「はい。我々もそう聞いていたからこそ情報を提供するのです。基本的にはライバルですからね……管理局と傭兵は」

いくら協定を結び、災害時には連携するとは言え普段の仕事ではかち合うことの多い局員と傭兵は基本的にはライバルな関係である。

だから普段の仕事では傭兵が陸士部隊から情報を受け取るなんていう事は滅多に無いのだがレジアスと個人的に親交のあるティアナはそれを可能にしていた。

「そうだな。まあ、個人間の親交には関係あるまい。それで誰だ？私の仕事を奪おうとするのは……」

ティアナの静かな怒りに息を飲むギンガ。

それもそのはず、ティアナはプロの傭兵である。

受けた依頼を横から奪われたとあっては信用に関わる問題だ。

今にも爆発しそうな、まるで火薬の如き怒気で辺りが剣呑な空気に包まれ始めた。

そんな中でギンガは恐る恐る答えを告げる。

「ほ、本局の……執務官の方です。休暇でミッドに来て……この件の違法魔導師のことを知ったそうで。俺が捕まえるから情報を寄越せと」

「ちっ、執務官か……厄介だな」

実は傭兵という存在は本局の魔導師に非常に受けが悪い。

何故かというと答えは簡単、彼らが管理局きってのエリート揃いで自身の仕事に強い誇りを持っているからである。

要するに自分達の誇りある仕事を邪魔するな、違法魔導師として逮捕するぞ……てな感じだ。

実際に公務執行妨害や無許可での魔法使用で拘束された傭兵も数多くおり、一種の社会問題にまで発展していた。

「……どうします？」

「どうするも何もこの仕事は管理局からの正式な依頼だ。当然こちらに優先権がある。まあ、あちらの文句は全部中将殿に聞いてもらおう。」

うわぁ、てな顔でティアナを見るギンガはレジアスのこれから来るであろう理不尽な苦労に一人同情する。

そんなやり取りをしている内に約束の時間も迫りつつあった為、二人は少しペースを上げて部隊長室に向かった。

部隊長室の近くに来ると中から男の声が聞こえてきた。

「三佐の声ではないな。という事は例の執務官殿か」

ティアナの呟きにギンガは静かに頷く。

しばらく様子を見ようという事になり、ドア越しに中からの会話を聞くとどうやら揉めている様だった。

「だから……そんな違法魔導師はオレがＨｕｎｔしてやるから情報寄越せって言ってるだろ！」

「いやだから、この件にはレジアス中将が依頼した傭兵が当たることになってるんだ」

「傭兵ぃ？　……Ｈａｍ！　そんなのが来なくてもオレがすぐにでも倒してやるよ。それでＮｏ　Ｐｒｏｂｌｅｍだろ！！」

なんて言うか凄く理不尽というか恐喝みたいな感じですね……

そう、ギンガが話しかけてくる。

しかしティアナは深く考え込みギンガの話を全く聞いてなかった。

「いや……まさか……でも私も……」

「……ティアナさん？」

何かを考え込んでいたティアナが急に顔を上げた為、吃驚したギンガがティアナに問いかけた。

「ティアナさん……どうかしたんですか？」

「ギンガ、中に入るぞ」

「……はい？」

呆けているギンガを尻目にティアナは部隊長室のドアを開けた。

其処にいたのは蒼い生地に稲妻の紋様のあるバリアジャケットを着込んだ眼帯の男。

「やはり……独眼竜……伊達政宗」

「Ａｈ……誰だ、手前ぇ？」

それは時代も世界も遠く離れた地で烏と竜が再会した瞬間だった。

第二話　再会（後書き）

ティアナ、強くしすぎたかな……

第三話　伊達政宗

伊達政宗。

第９７管理外世界出身の魔導師であり、本局所属の執務官である。

高い戦闘能力と豊富な魔力、並びに魔力変換資質「雷電」を持ち、

その実力は管理局内の全魔導師の中でも指折りの存在だ。

だが、その政宗にもあまり公に出来ない秘密がある。

そう、ティアナと同じ前世の記憶を持っているのだ。

他の誰でもない「奥州筆頭」伊達政宗の記憶を。

しかし、彼の場合はティアナと一つ違うところがあった。

今現在の名もまた伊達政宗という名前なのだ。

これはどういう事かと言うと、彼は戦国に生きた伊達政宗の直系の

子孫に当たる伊達家の嫡男である。

かつて家康の開いた江戸幕府で確固たる地位を築き上げた伊達家は

現代も残る名家の一つだ。

今は仙台を本拠とする一大和菓子メーカー「竹雀屋」となっている。

そこで生まれた政宗は生まれつき右目が悪かった。

いや、だからこそ政宗と名付けられた。

つまりは、例え片目が悪くても同じ境遇のご先祖様に肖り(あやか)、それにめげずに立派になって欲しいと名付けられたのだ。

中身はそのご先祖様ご本人だった訳であるが。

そして幼少の頃、彼の両親が支社の視察の為の転勤で引っ越した先で彼は魔法と出会った。

その場所とは……そう、海鳴市。

ちなみに、かのエースオブエース達とは幼馴染みの仲である。

まあ彼の場合、目指して執務官になった訳ではなく自分に出来ることを遣っていたら何時の間にか資格を持っていたのだが。

しかし、その彼が何故このような場所にいるのか？

その答えは簡単。

ただ単に休暇であり、この近くに彼個人の別荘があるからだ。

つまりは別荘でゆっくりしようとした所、この辺りで違法魔導師が潜伏しているという噂を聞き、ならば捕まえてやろうと近くの陸士部隊に情報を貰(うば)いに来たのだった。

そして今の状況に至る。

「……まあ、分からないのも無理はないか」

ティアナは今の自分の容姿を思いながらそう呟く。

例え自身の前世が雑賀孫市であり、その記憶を持とうとも今の彼女はティアナ・ランスターである。

無論、その容姿はかつての孫市とは全く違っていた。

「っと、ランスターか。ちょいと待っといてくれ。今、執務官殿と話を着けるからな」

ゲンヤがそう言ってくるがティアナとしては目の前の男と話がしたい。

そこでゲンヤに提案し、なんとか二人きりなろうとした。

「ナカジマ三佐……一応、私が依頼を請けた当事者だ。ここは私が話を着け、結果この件を担当するものが情報を貰う。これでいいのでは？」

「Ｈｕｍ……お前がその傭兵って奴か。……Ｏｋｅｙ！　取り敢え

ずはそれでいい。おい、おっさん！　どっか二人で話し合える場所を用意しな。差し中っては訓練室なんかがＢｅｓｔだ！！」

話し合いをするのに訓練室に行く必要なんて全くない。

恐らくは自身の実力を見せつけ、この一件を奪うつもりなのだろう。

この男のそんな所は全く変わっておらず、ティアナは思わず薄ら笑みを浮かべた。

「それは構わんが……って、おい！　ここでやり合うつもりか！？……勘弁してくれ、俺がレジアスの旦那にどやされちまう」

「局員が一般人に攻撃魔法を使ったとなれば問題があるが……こちらは傭兵だ。いつもの合同演習、戦闘教練とすればいい。それなら中将殿も文句は言うまい」

「いや、俺が心配してるのはそうじゃなくてだな。あの人、武闘派で通ってるから制裁は体育会系だし、何気に凄いＭｕｓｃｌｅなんだぞ……あっ、感染（うつ）っちまった」

ティアナの的外れな心配に、もう中年の域に差し掛かろうとしているゲンヤが本気の涙目で嘆いた。

ミッドの平和を守るレジアスの依頼した仕事が本局の魔導師に奪われたとあっては地上本部の面目丸潰れだ。

そんな訳だから当然ながら情報を渡す役を仰せつかったゲンヤの責任は重大である。

もし、ゲンヤがティアナに情報を渡せなかったとしたら、あまつさえ本局執務官に解決されたとしたら……

きっとミッドに赤いサイクロンが吹き荒れることになるだろう。

本部の野外訓練場で首だけ地面に埋まった同僚を幾人も見てきたゲンヤにとってそれだけは何としても避けたかったのだ。

「Ｄｏｎ'ｔ　Ｍｉｎｄ！……別に手柄が欲しいわけじゃねぇ。休暇とは言えどある程度は動かないと体が鈍っちまうからな。こんなのはＲｕｎｎｉｎｇと同じだ」

「手柄は寄越すから此処で大人しくしてろと……こちらも舐められたものだな。……三佐、訓練室で構わん……用意してくれ」

どうやら今の遣り取りでティアナは完全に火が入ったようだった。

その反応をみて政宗はむしろ心躍るようだ。

獰猛な笑みがそれを証明している。

「Ｈａｍ！　どうやらＰｒｉｄｅはあるみたいだな。こりゃ違法魔導師よりは楽しめそうだ」

「当たり前だ。請け負った仕事はきっちり果たすのが私の誇りであり生き様だ。今、それをじっくりと思い出させてやろう」

嘆くゲンヤを尻目に完全にやる気になった二人は互いに互いを睨み合う。

ゲンヤはその背後に炎を纏う三本足の烏と雷を纏う独眼の竜を見たような気がした。

陸士１０８部隊訓練室。

貸切にされた、そのだだ広い部屋にいるのはティアナと政宗、そして部隊長のゲンヤとその娘ギンガである。

「一応ルールを確認するぞ。降参するか魔力エンプティで気絶したら負け。それ以外は自由だ。まあ、好きにやってくれ。加減なんかは俺が説明するよりもお互いに分かってるだろう」

もう既に何もかも諦め、審判役を買って出たゲンヤによってルール確認がされる。

まあ、遺恨を残さないようにと殆ど自由になってるのでルールも何

も無いのだが決まりは決まりだ。

二人は聞いてるのか聞いてないのか、終始無言のまま戦闘準備を済ましていく。

そんな中、ティアナは小声で相棒のゼフィロスに話し掛けた。

「ゼフィロス、セットアップしろ。相手は独眼竜。生半可な相手ではない……最初から仕掛けるぞ」

『了解。バリアジャケット展開、ヤタガラス出します』

前世で着ていた戦装束をイメージしたバリアジャケットを纏い、両手に白と黒の二挺拳銃を顕現させたティアナは無言で佇む伊達男に目を遣る。

そこには早く始めろと言わんばかりに片目を大きく見開いた竜がいた。

ゆっくりと刀剣型アームドデバイス「アラストル」を構えて開始の合図を今か今かと待っている。

ティアナもそれを確認し、こちらもゆっくりと構えをとった。

「双方いいな？　では……始めっ！！」

その号令と共に両者は激突した。

まず仕掛けたのはやはりティアナである。

低くした姿勢ままで突撃し政宗に鋭い蹴りを放ったのだ。

当然ながら反応し、蹴りを防ぐ政宗だったが、そこから更にティアナの攻撃は続く。

すぐさま脚を戻し、銃を構えたティアナはこれでもかと言わんばかりに銃撃を浴びせた。

二挺拳銃から放たれる弾はもちろん実弾ではなく魔力弾である。

射撃魔法「シュートバレット」

ミッド式の基本的な射撃魔法の一つだが、ティアナが改良したそれは、もはや別物と言えるものに変貌していた。

極限にまで圧縮、固定された魔力を螺旋状に回転させて放つそれはティアナによって「スパイラルバレット」と名付けられている。

その威力は通常のシュートバレットとは比較にもならない程であり、さらに特筆すべきはその強度と貫通性だ。

生半可なシールドやバリアならいとも容易く食い破り、敵を穿つその弾丸はティアナが最も信頼しているものだった。

政宗もその危険性に逸早く気付き、防ごうとはせず出来るだけ避けて隙を伺っている。

「どうした独眼竜。避けるだけでは私は倒せんぞ」

「手前ぇ、どうしてその名を……それにこの動きは……」

ティアナは政宗の上段からの一閃を銃をクロスさせる事で受け止め、すぐさま弾きながらも狙いを定めるがすでに政宗はそこにはいない。

「Ｙｅａｈ！　ＰＨＡＮＴＯＭ　ＤＩＶＥ！！」

何時の間にか三刀に持ち替えた政宗の空からの強襲をバックステップで交わすティアナ。

置き土産と言わんばかりにスフィアを当たりにばら撒いた。

炸裂自在式火弾魔法「ヒレンジャク」

ティアナのオリジナル魔法である。

政宗の周囲で次々に連鎖爆発を起こし、凄まじい爆炎が辺りを飲み込んでいく。

しかし魔力爆発に巻き込まれた政宗だがティアナにはある確信があった。

奴ほどの男がこの程度で終わる筈が無い、と。

「ＭＡＧＮＵＭ！！」

爆炎を切り裂くように三刀を回転させ突撃してきた政宗を待っていたとばかりに迎撃するティアナ。

なんとか政宗の突撃を捌いたティアナだったが、その顔は驚愕に彩られることになる。

今まで片方しかなかった三刀がもう片方にも握られていたのだ。

「おまけだ！　取っときな！！」

右腕から放たれる三刀の一撃が遂にティアナを捕らえた。

「ぐっ！！」

咄嗟に防御魔法を発動し、何とか致命的な一撃を防いだティアナだったが政宗の攻撃がこれで終わるはずが無い。

「Ｙｅｓ！　よく防いだ！……ＪＥＴ－Ｘ！！」

「……はあっ！」

一撃を受けた混乱から回復したティアナは政宗の連撃を的確に捌いていく。

だが攻撃を受ける度に政宗の魔力によって迸る電撃がティアナにダメージを与えていた。

（まずいな……予想以上に電撃のダメージが大きい。ならば……）

ティアナは襲い来る電撃の痛みに耐え、機を窺う。

そしてその時はやって来た。

この膠着状態に業を煮やした政宗が強烈な一撃を繰り出すため一度溜め込む瞬間を。

「Ｙｏｕ　Ｊｕｓｔ　Ｂｒｅａｋ！！　こいつで終わ……」

「そこだ！！　モードシフト・クロッグミ！！」

一瞬にして拳銃からショットガンへと変貌を遂げたヤタガラスを構え、引鉄を引く。

放出された大量の魔力弾は周囲の空間ごと政宗を吹き飛ばした。

「がぁああッーーー！！」

炸裂した魔力弾の一つ一つは威力が低いもののそれを全身に浴びた政宗は大半の魔力を削られていた。

だがティアナも攻撃を耐えている間、常に電撃に晒され体力を消耗している。

「どうだ、思い出したか……この私を……」

「ああ、思い出した……ん、よっと」

勢いをつけて飛び起きる政宗をティアナは肩で息をしつつ見ている。

交わされる会話にゲンヤとギンガは疑問を持つが二人は気にしていない様だった。

「ふう……久しぶりだなぁ、三代目。元気だったか？」

「ああ、そうだな。久しいな独眼竜」

お互いの得物をぶつけて挨拶を交わす二人。

すでにゲンヤ達は状況に着いていけず困惑していた。

「えっと……お二人はお知り合いなんですか？」

ギンガが代表して質問する。

それに答えたのはティアナだった。

「そうだな……まあ、古い馴染みだ」

「Ａｈ、確かに古い馴染みだな」

政宗も肯定する。

そこでゲンヤが声を上げた。

「二人が知り合いなのはいいが……結局どうするんだ？」

そもそもこの決闘はどちらが仕事を請けるかで行われたものである。

何となく二人がもう戦う気が無い事を読み取ったゲンヤがそう聞くのは当然のことだった。

「オレの負けでいい。そこそこ楽しめたしな」

「私も久しぶりに楽しめた。独眼竜、礼を言っておく」

なんとかティアナに情報を渡せそうで安心するゲンヤ。

娘のギンガはそんな情けない父親を悲しいやら呆れたやらで複雑な顔して見ていた。

「三佐……後で情報を貰いに行くから少々二人きりにして欲しい。積もる話もあるのでな」

「わかった。俺の部屋にいるから終わったら来てくれ。ギンガ行くぞ」

「はい。ではティアナさん、また後で」

ナカジマ親子はそう言うと訓練室を出て行った。

今現在ここにいるのはティアナと政宗だけである。

「ゼフィロス……結界を」

『了解。結界を展開します』

「遮音結界か。相変わらずの用心深さだな」

「好き好んで聞かれたい話でもあるまい」

「まあ、そうだな。じゃあ改めて、久しぶりだな雑賀孫市」

「ああ、伊達政宗。関ヶ原以来か……お前に会うのは」

この二人……否、前世の二人は同じ東軍に属しており戦友と呼べる間柄だ。

最後に別れてから既に４００年近く経っているが、関ヶ原で戦死した孫市は気付いたらティアナへと生まれ変わっていた為、感覚的には十数年振りの再会だった。

ちなみに政宗は関ヶ原の戦いの後も徳川の家臣として老年まで仕えていた為、孫市との再会は数十年振りだったりする。

「取りあえず、今の私はティアナ・ランスターだ。一応覚えておいてくれ」

「Ｏｋｅｙ！　ティアナだな。今度からはそう呼ばせてもらう。オレの名前は変わってないんでお前の好きなように呼んでくれ」

「変わってない……だと。一体、どういう事だ？」

政宗は自身の事をティアナに話した。

生まれの事、名前の事、今までの経歴などを話していく。

それを受けて、ティアナも自身の事を話す。

「成程な……まさか、自身の子孫に生まれ変わるとはな」

「Ｈｕｍ……生まれ変わってもやることが同じとは相変わらずＣｏｏｌな奴だぜ」

互いの情報交換が済んだため今回はお開きとなった。

だが、訓練室を出ようとするティアナに政宗が最後に声を掛ける。

「ティアナ、近々オレの知り合いが部隊を立ち上げるんだが……それに協力してやってくれねぇか？」

「……契約か？　我らは我らを最も評価する者と契約する。それが雑賀衆の誇りであり私の生き様だ。例え生まれ変わったとしてもそれは変わらない。もう忘れたか？」

「忘れてねぇよ。一応言っただけだ。まあ、八神の奴がお前の事を評価するなら契約してやってくれ」

「分かった。だが力で抑えようとするのなら手痛い目にあって貰う。それを踏まえて、その八神とやらに私の事を話すがいい。気が向いたら契約してやってもいいとな。お前の推薦故の特別な配慮だぞ」

「Ｔｈａｎｋｓ！　感謝するぜティアナ！」

「ふふ……ではな独眼竜」

訓練室を後にし、ティアナは部隊長室に向かった。

第三話　伊達政宗（後書き）

戦闘シーンって難しいです……

第四話　依頼（前書き）

オリキャラ注意報が発令されました。

耐性のない方はお気を付け下さい。

第四話　依頼

陸士１０８部隊で情報を貰ったティアナは一日置いて早速仕事に入った。

まあ、これには特筆すべき事は何もない。

数日後、推定ＡＡＡランクと思われる一人の違法魔導師がまるで襤褸屑のような姿で地上本部に引き渡されただけである。

それはさておき。

それから幾日か仕事もなくティアナは久方振りの休暇を楽しんでいた。

「……暇だ」

『……暇ですねぇ』

否、もうあまり楽しんでなかった。

そもそもファッションやショッピング等の娯楽といったものにあまり興味も無く、唯一の趣味と言ったら銃の分解整備か戦闘訓練ぐらいなティアナだ。

始めの頃は疲れをとるために休んではいたが、しばらくしてデバイスの整備や装備の確認に勤しみだし、訓練も軽めながら毎日こなし

て、わずか数日で決壊を迎えたのである。

「ゼフィロス……仕事は無いか？　もうこれ以上は耐えられん。何でもいい……この際、迷子の子猫探しでも構わん」

『無いですよそんなの。最近は管理局も頑張っているお陰か治安もそこそこ良くなってますしね』

どうやら本当に限界のようである。

まあ、ティアナにとって戦いこそが生き様であるため、その戦いが無いというのは苦痛でしかないのだろう。

『むっ……マスター、どうやらお客様のようですよ』

ゼフィロスのその声でティアナは表情を元に戻した。

アジトの廃ビルを囲むように張られたセンサーに誰か反応したのだ。

ティアナのアジトはミッドチルダの首都クラナガンから少し離れた廃棄都市群の中にあり、外見は完全に廃ビルそのものである。

その職業柄か襲撃される事も多々あるティアナは自分のアジト周辺に警戒用のセンサーを張り巡らし、誰かが近づくとゼフィロスが感知するようになっていた。

近づいたのが単なる通りすがりや普通の客なら良いが、招かざる客がきた場合、迎え撃つためにアジトの中には即時発動できる罠が物理的（イジカル）、魔導的（マジカル）問わずに張り巡らされている。

また、周囲のビルもティアナが戦闘しやすいように改造されているため、この都市群そのものが一種の要塞と化していた。

「ゼフィロス……どんな感じだ？」

『スーツ姿の男性が一人です。魔力反応無し。刺客という感じではないですね。まあ、姿形では判別出来ませんが』

「罠は合図ですぐに起動できるようにしておけ。フェイクシルエットとオプティックハイドを発動。警戒しつつ様子を伺う」

ティアナは幻影魔法で姿を消し、自分の分身（デコイ）を発生させた。

このような厳戒態勢をしくのは、かつて依頼人を装った刺客の襲撃を受けたからだ。

ちなみにその時は襲撃に反応し発動した罠の数々で刺客には高い授業料を払って貰ったのではあるが。

『了解。F・S並びにO・H発動……お客様、入ります。3，2，1……』

丁重にドアがノックされ、初老ぐらいの少し太り気味の男が中に入ってきた。

「すみません……太陽(ソル)の烏(レイブン)さんの事務所はここですかな？」

〈ええ……依頼ですか？〉

壁際に隠れたティアナは念話を応用しデコイが喋っているように仕向ける。

魔力消費は高いが質感なども再現してあるため殆ど本物と代わりない程のデコイだ。

この男が刺客なら何らかの行動を起こすだろう。

ティアナはそれを注意深く見ながらも自身の優位な位置に移動する。

「はい……どうか力をお貸しいただけませんか？」

〈その前に……此処の事は誰から？〉

これは意外と重要な質問である。

アジトの場所を知っている者は限られている為、この男の背後関係を知る絶好の情報源となるのだ。

それがティアナの知らない人物だったら刺客の可能性が高いし、逆に知る人物だとしても安心は出来ない。

だが、うまく捕らえる事が出来たら報復の際に優位に立てるので誰の紹介かという質問をティアナはいつも使っていた。

「地上本部のレジアス中将です」

〈ほう、中将殿から。どうぞお入りを、詳しいお話は応接室で……〉

ティアナはデコイを操作しソファーに座らせる。

男も失礼してと一言かけて同じように座った。

〈まずは貴方がどういった身分の方とお聞きしても？　守秘義務は厳守致しますのでご安心を〉

「はい……私はミッドチルダ国立博物館館長のロイス・ロールスと申します。これが名刺です」

名刺を受け取り確認する。

個人認証も付いているＶＩＰ用の名刺だ。

魔導技術を応用したもので指紋・瞳孔・静脈認証等で本人と確認できる最高級品である。

これでこの男が刺客ではなく依頼客だと確定できた。

「成程……あの国立博物館の館長か。仕事で何度か訪れたことがあるな」

突然の背後からの声にロイスは驚き振り返った。

そして後ろにいるティアナの姿を確認し、目の前のティアナと見比べさらに驚愕する。

「失礼……目の前にいるのは魔法で作った分身（デコイ）です。何分、恨みを買う職業ですので最低限の警戒をしました。非礼を謝罪します」

「いえ……成程、あの中将が諸手を挙げて推薦するのも頷ける。お願いです、私に力を貸していただきたい。報酬でしたら相応の物を用意します」

ティアナは分身（デコイ）を消し、それが座っていた全く同じ場所に腰を掛ける。

それは……あたかも時間が巻き戻ったかのような印象を受ける程、完璧な演出であった。

「さて、まずはお話を窺いましょう。受ける受けないはそれからで

す。出来ないことを出来るといって信用を落とすのは嫌なのでね」

「はい……実はある品を悪意の手から守ってもらいたいのです」

「ある品……悪意の手……それで？」

「この様なカードが先日、私の下に届きました」

そう言ってロイスは懐から一枚のカードを取り出しテーブルに置いた。

ティアナは失礼と一言断り、それを手に取り読み上げる。

「【次に月が真円を描く夜、古の玉石を戴きに参上仕る　「桜花絶景」怪盗ラパン】」

「そうです。あの怪盗ラパンです」

怪盗ラパン。

それはミッドチルダを中心に活動する、今、巷で最も話題となっている盗賊の名だ。

年齢、性別、出身世界。

その全てが謎に包まれており、不当に利益を貪る企業や不正を働く官僚、管理局員等を相手取って盗みを働き、そしてそれらを恵まれ

ぬ民衆にばらまいている。
その他にも美術品や貴金属、危険度の低いロストロギアも盗むが比較的、ミッド市民からは義賊として扱われていた。
その盗めるなら例え星の光だろうと盗むとまで言われる怪盗が次の獲物に国立博物館を指名したのである。

「この古の玉石と言うのは？」

「それは来週から開催される古代ベルカ展で一番の目玉となる一品「聖王の涙」の事かと。他にも色々と宝石類はありますがそれに勝る物はございません」

「ふむ……月齢から考えて月が真円を描くのは三日後か。分かりました、お引き受けしましょう。」

「本当ですか！　ありがとうございます！！」

「ああ、あともう一つ。あなたの人となりを信用して分身（デコイ）の事は話しましたが……私の安全の為、出来れば内密でお願いします」

「わ、分かりました。誓って洩らしません」

その後、報酬の話など細部を詰め、ロイスは満足げに帰っていった。

誰もいなくなった応接室でティアナは今回の依頼について考える。

「怪盗ラパンか。だがあの予告状に書かれた「桜花絶景」という言葉は以前どこかで聞いたことが……」

ティアナは思考を深め、己の記憶を探る。

（ティアナ・ランスターのではなく、雑賀孫市の記憶に確か……）

――――絶景かなぁ絶景かなぁ。この春の宵、値千両とは小せえ小せえ。俺が払えば値万両万々両……まあ、そんなに蓄えないけどね……っと、また会ったな孫市！――――

「そうだ、あの男だ……間違いない。怪盗ラパンの正体は……「桜花絶景」石川五右衛門だ」

『石川……五右衛門……ですか？　マスター、それはどういった人物です？』

ゼフィロスの質問にティアナは少し考え込んだ。

おそらくかの人物について、出来る限りの事を思い出しているのだろう。

「石川五右衛門は私の前世、雑賀孫市と同じ時代に生き、天下の大泥棒と呼ばれた盗賊だ。時の天下人「烈界武帝」豊臣秀吉に異を唱え、奴の軍から金や食料を盗み、貧しい民に分け与えていた。覇王秀吉は強力に富国強兵を押し進め、あまり民草を省みることは無かったからな……貧しい者には五右衛門はさぞかし救世主に見えたのだろう」

『典型的な義賊ですね。マスターと知り合いなのですか？』

「何度か会敵したというだけだ。当時、我らは豊臣に雇われていた。その中で奴とは幾度も対峙しているがその度に態と逃がしてやった。豊臣は我らを力で抑えようとしていたからな。まあ、その意趣返しと言うやつだ。性格は見栄っ張りで派手好きだが根は小心者。なかなか女々しい奴だったが強大な豊臣に一人で敵対していた事は素直に評価している」

『なるほど……その五右衛門が今回の相手という訳ですか。しかしマスター、何か対策はあるのですか？　話を聞くになかなかの使い手かと思いますが』

「奴は変装と遁法の名手だ。忍の術も使えると聞く。転生した事でどれだけ使えるかは見てみないと分からないが幻影対策はしておくべきだろう。幸いこちらもある程度は幻影魔法については知識はある」

ティアナは自身の持ちえる知識を確認しながら自信満々で告げた。

「ふふ、待っていろ石川五右衛門……いや怪盗ラパン。今度は逃げる事は叶わぬと知れ」

決戦は三日後のミッドチルダ国立博物館。

その時、更なる出会いがティアナを待っているとはこの時は知る由も無かった。

第五話　怪盗ラパン（前書き）

お待たせしました。

引き続きオリキャラ注意報発令中です。

御都合的な場面もあるかも……

第五話　怪盗ラパン

そして三日後。

月が真円に輝く夜、ミッドチルダ国立博物館にティアナはいた。

来る決戦の時間に向けて準備を整えていた所にロイス館長の寄越した迎えの車が到着し、それに乗ってやってきたのである。

「おお、ティアナさん。ご苦労様です」

案内され、博物館内の特別展示会場と呼ばれる別館にやってきたティアナにロイスは声をかける。

円形ホールのような会場には既に大勢のガードマンらしき黒服が詰め、自身の持ち場を固めていた。

「ロイス館長。この会場にいる者の本人確認は済んでいますか？ラパンは変装の名手です。既に入り込んでるやも知れない」

「ご安心を。ティアナさんに教えて頂いた変装を見破る方法は既に全員に行っております。しかし、案外簡単なんですなぁ。このような方法で幻影魔法を破れるなんて」

ティアナはロイスにラパンが仕掛けるであろう幻影魔法の対策を伝

授していた。

それは指紋等による個人確認と会場内に膝の高さ程まで焚かれたスモークである。

いかに魔法で姿を偽ってもそれはあくまで幻像を着ているだけであり本体はそのままだ。

それでは肉眼による確認は誤魔化せても機械による認証は誤魔化せない。

ロイスはティアナからこれを聞き、すぐにガードを担当する者全ての指紋等を記録させ、そして確認していた。

スモークもについても同じだ。

魔法で姿を消しても存在が消えたわけではない、見えなくても本体はそこにいる。

つまりはスモークが焚かれた状態で動けば生じた気流によりスモークが不自然に揺れるのだ。

これらによってティアナはラパンの幻影魔法による進入を確実ではないが未然に防ごうとしていた。

「一応、私も指紋認証を。しかし、ロイス館長……これらはあくまで予防であり確実ではありません。魔法による変装は防げても物理的な変装は防げないのです。かつての奴の犯行にマスクでの変装が確認されてます。まあ、対策はこうして頬を引っ張るくらいしか無

いですが」

ティアナは自身の頬を思い切り引っ張り確認を行う。

とても痛そうだが全く表情が変わらないティアナを見てロイスは少し寒気がした。

「失礼します！　時空管理局です！！」

外に通じる唯一の扉が開き、年若い女性を先頭に数人が入ってきて名乗りを上げた。

リーダーと思われる女性が辺り見渡し、ロイスを確認すると部下をそこで待たせ脇目も振らずこちらにやってくる。

「ロイス・ロールス館長ですか？　私は時空管理局本局所属ラパン専従特別捜査官ジェニー・ガーター一等空尉であります。どうかよろしくお願いします」

「おお、ご苦労様ですガーター一尉。ラパン捜査の第一人者である貴女が来てくだされば心強い限りですな」

「いえ、恐縮です。それよりこちらの方は？」

ジェニーはティアナに視線を向けロイスに問う。

ちなみにティアナより身長がかなり低いので完全に見上げている状態だ。

「ああ、こちらはティアナさん。傭兵の方ですよ。今回の護衛をお願いしましてね」

「ティアナ・ランスターです。よろしく……ガーター一等空尉殿」

ロイスからの紹介を受け、渋々挨拶をするティアナ。

ジェニーはティアナが傭兵だと知ると鋭い目つきで睨んできた。

「傭兵の方ですか……まあ、見学だけならいいです。決して！　我々の仕事の邪魔だけはしないようにお願いしますよ」

ジェニーはそう言うと部下達の下に戻っていった。

どうやら典型的な本局魔導師らしく傭兵を快く思ってないようである。

ティアナは軽く溜息を吐き、見回りを始めるためロイスに声をかけた。

「ロイス館長、私も見回りを開始します。一尉殿にはああ言われま

したが私にも誇りがあるのでね」

「よろしくお願いいたします。太陽(ソル)の烏殿(レイブン)」

さて、ここで今回の護衛対象である「聖王の涙」について軽く説明しておこう。

「聖王の涙」は古代ベルカ時代の遺跡より発掘された結晶体である。その形は特徴的であり、下に半円の付いた円錐……ちょうど涙型といったら分かりやすいかも知れない。

さらにこの結晶体の特筆すべき所はその輝きであり、なんと虹色に光を放つのだ。

これは古代ベルカに君臨した聖王独特の虹色の魔力光「カイゼル・ファルベ」と同じ色であり先の涙型の造形と相まってこの神秘の石の由来となっている。

古代ベルカ展には他にも数千点以上に及ぶ古代ベルカの遺産が展示されているが、この「聖王の涙」は別格の存在であり専用の展示会場が別館として用意されるくらいだ。

それがこの特別展示会場である。

この会場には特殊な仕掛けがあり、高い天井のある一カ所にのみ円形の天窓が付いてある。

月の軌道上に設けられたその天窓に月が来ると、その光が「聖王の涙」に丁度当たるように計算して設計されているのだ。

これは月の光によって「聖王の涙」の放つ虹の光が更に煌めくためである。

これが古代ベルカ展最大の目玉となっていた。

そして現在、午後九時五五分。

「もうすぐ十時か。ロイス館長が言うには大体十時にあの天窓に月が満たされるはず」

ティアナは天井に唯一設けられた円形の天窓に視線を向けた。

もう月は半分以上姿を見せているが時間になれば天窓の大きさいっぱいに月が輝くという。

ティアナは慎重にいつ来るやも知れないまだ見ぬ敵の気配を探り、念入りに辺りを見回す。

「聖王の涙」の周辺はあのジェニー・ガーター特別捜査官とその部下五人が完全に固めており、不用意に近づくとジェニー一尉が唸りを揚げて威嚇してくるほどだった。

「ゼフィロス、センサーはどうだ？」

『反応はありません。特に進入口となるであろう扉とあの天窓は重点的に精査してますが何もないですね』

「やはり、すでにこの会場内に潜り込んでいると考えるのが妥当だな」

（だとすると……やはり怪しいのはあいつ等か）

ティアナの視線の先にはジェニー達、管理局の一団が存在していた。

（だが、彼らにも機械認証と物理確認を行ったが一切不備はなかった……）

実は、ロイスは管理局にも今回こちらに来る面々の指紋等、個人認証が出来る資料を請求していた。

管理局から届いた資料と彼らの個人データを比較し、確たる本人だと証明したのである。

ちなみにジェニーは自身の知らない幻影魔法の破り方に終始感心していた。

だがロイスが提案のしたのはティアナだと教えるや否や見回りをするティアナを睨み、

「ラパンを甘く見るな！奴にこんなものは通用しない！」

と、何故か急に怒り出してしまった。

どういう訳か涙目でティアナを睨むジェニーに対し、唖然と呆けているティアナの姿がとても印象的だったと後に彼女の相棒は語っている。

それはさておき。

時計の短針が十の数字を指し、真円の月がその姿を全て天窓から確認できるようになって間もなく……

「なっ！？」

辺りは一切の闇に包まれた。

一切の闇。

一寸先も見渡せない完全な闇。

天窓から見える空には輝く月が存在してはいるが会場内はその闇に包まれていた。

「えっ？」

いや、それはおかしい。

先ほど説明を受けたはずだ、「聖王の涙」は月の光を受けてより一層光輝く。

それも目映いくらいに虹色の光を放つのだと。

なのに……会場の中は完璧に闇の中。

拭えない違和感はこの暗黒の世界に光が満ちた瞬間、明らかになった。

誰もが予想したように。

誰もが予想し得なかったように。

「聖王の涙」は接触性のスタントラップが付加されたケースに入れられ、幾つもの感知センサーと見張りの目の網が張り巡らされた厳重警護の台座からその姿を失わせていた。

光が消え、再び灯るまでの僅か二秒間の出来事である。

「……消えた」

誰のものかは分からないがその呟きは小声にも係わらず、静寂が支配するこの空間では嫌にはっきりと聞こえた。

皆が唖然と呆ける中、即座に事態を認識したティアナが大声を上げる。

「全員動くな！！　動けば即座に撃つ！！　ゼフィロス、結界を張れ！　最大強度でだ！」

『了解。封鎖結界展開。消費が激しいです……長くは持ちません』

ティアナの命令によって、ゼフィロスはあらかじめ術式を構築していた結界を発生させた。

これは外からの進入も中からの脱出も防ぐ強装封鎖結界である。

本当はずっと張っていられれば良いのだが、ティアナはこの手の魔法はあまり得意ではなく、また魔力の消費がかなり激しいため、発動させる瞬間はこの時を置いて他になかったのだ。

「構わん。ロイス館長、人員の確認を。消えた者はいますか？」

ティアナはロイスにガードマンの人数を確認させる。
しばし呆けていたロイスはティアナの発言によってようやく意識をこちらに戻し、慌ててガードの人数確認を行った。

「――――――大丈夫です。全員確認しました」

「そうですか」

ティアナが一先ずの安心を得たが、すぐに問題が降って湧いた。
ラパン専従特別捜査官ジェニー・ガーター一尉である。

「ちょっと！！　何で貴方が指揮を執ってるんですか！　我々の捜査の邪魔です！　早く解放しなさい！！」

ティアナは即座にジェニーに銃口を向け、場は一触即発の状態へともつれ込んだ。

「なっ！？　貴方……自分のしていることが分かっているのですか？　公務執行妨害ですよこれは！！」

「悪いが私も仕事だ。むざむざラパンに逃げられる訳にはいかない」

「既にラパンは逃げているかもしれないのに此処で貴方に構っている暇はないんです！　それが分からないのですか！　だから傭兵な

んて連中は……」

互いが互いを譲らず、剣呑な空気が辺りを包み始める。

もう少しすれば銃撃戦が始まってしまうだろう。

無論、ティアナが先に仕掛ける方で。

だがジェニーの部下の一人が声を上げたことでそれは回避された。

「ジェニー一尉……今、外で物音がしました。もしかしてラパンは既に外に」

「本当ですか准尉！？」

「はい、確かにこの耳で聞きました。ラパンは既に外にいます。早くしないと逃げられてしまいます」

「ほら、早く我々を解放して下さい！　ラパンに逃げられてしまうでしょう！！」

部下の一人が外からの物音をジェニーに報告した。

彼女からの報告によりジェニーの口撃はさらに勢い付いていく。

それにより途中から無言を貫いていたティアナは渋々銃口を下に向け、結界を解いた。

「分かればいいんです。今回のことは罪には問いませんから貴方はそこで大人しくしていなさい。皆さん行きますよ！　今度こそラパンを捕まえます！！」

意気揚々と声を上げジェニー達は扉から外へ出て行く。

「ロイス館長、私も行きます。貴方はここに残ってください」

ティアナはそう言うと月が輝く夜空の下へと駆け出した。

別館の外へ出たティアナはジェニー達の一団を発見し、

「逃げ切れるものか。お前はもう既に私の網の中だよ……怪盗ラパン」

したり顔でそう小さく呟いた。

第五話　怪盗ラパン（後書き）

やはりちょっと無理があるかも……

第六話　真相（前書き）

お待たせしました。

怪盗ラパン編は今回を含め、あと二回で終了予定です。

はたして怪盗ラパンの正体とは……

第六話　真相

草木も眠る丑三つ時……という訳ではないけれど、深い夜の闇に包まれた街の一角。

全く人気の無い、ビルとビルとの間に出来た人工的な死角の道を一人の人物が走っていく。

「はぁはぁはぁ……ふふん、此処までくれば一安心だな」

その人物――怪盗ラパンは追っ手がいないのを確認し、一息付いた。

「ふう、あの傭兵とか言う姉ちゃんは何故か懐かしい様な危険な香りがするが管理局の方は全くちょろいもんだ」

ラパンは今はデバイスの格納領域にしまってある今回の獲物を省みた。

そしてその神々しいまでの姿を思い出し、一人悦に入る。

「古代ベルカの秘宝「聖王の涙」。正に私のコレクションに相応しい一品だ」

ラパンは貧しい民衆に分け与える物以外は盗んだ宝を売るなんて事は絶対にしない。

金が欲しいのではなく世界中のお宝を手にしたいというロマンと厳重な警備の中から盗みを働く、その絶対的な緊張から生まれるスリル、そしてそれを成し得た時の爽快感。

それらを求めて盗みを働くのだ。

「さーて、我が愛しのＦＩＡＴ５００【三世代目ＳＰＯＲＴ白】ちゃんのとこまでもう少し。頑張りますか」

ラパンの短い休憩も終わり、隠してある愛車の元へといざ行かんとした瞬間、

「残念だが……お前の逃避行も此処で終焉だ。怪盗ラパン」

と、言う声がすぐ背後から聞こえてきた。

ラパンはその声にすぐさま反応し、後ろを振り返るや否や、目映い光がまるでスポットライトのように周囲を照らす。

橙色のスフィアから指向性の光が出ており、ラパンはその強烈な光に思わず手で目を覆った。

光に目が慣れてきたので手の影からそっと光源の方を覗き、声の正

体を見てみると、
其処にいたのはその懐かしくも危険な香りがするあの傭兵。
「お前は……傭兵の……確か、ティアナ・ランスター」
「その通りだ。怪盗ラパン……いや」
物陰から現れたティアナが出てきて早々に言い放ったのは、
「時空管理局本局魔導師。名前は確か……スピアーノ准尉だったか」
ラパンの正体だった。
その管理局の制服に身を包んだ少女――ジェニー一尉に物音を報告したスピアーノ・マッダ准尉は目を覆っていた手を下ろし、静かにティアナと対峙する。

意図せず作られた街の死角。
表通りにはまだ人々が賑やかにしているのに、この入り組んだ路地

裏では二人の少女のみが存在していた。

「一体何の事ですか？　私がラパンだなんて……私はそのラパンを探して此処にいるんです。変な言い掛かりはやめてください」

「いいや、お前がラパンだよ。私が追いかけて来た事がその証拠だ」

ティアナは自信を持ってスピアーノがラパンだと告げる。

スピアーノは冷静を装いつつも内心冷や汗が流れ続けていた。

「（どうして分かった！？　いやここは何とかして誤魔化さないと……）いい加減にしてください、公務執行妨害ですよ！　この事はジェニー一尉に報告させて頂きますから！」

「私も報告するさ、お前がラパンだとな。それより気にならないか？　どうして私が気付いたのか」

自分は証拠となるものは一切残していないとスピアーノは自負している。

だがそれを破り、このティアナという傭兵は自身の正体へと迫ってきた。

確かに気になるが、それを聞いたら最早言い逃れは出来ないとスピアーノは直感的に悟った。

だから、スピアーノは誇ってもいい。

危険な香りがするとティアナを見た瞬間に感じた己の危険に対する嗅覚を。

ティアナは確かにスピアーノに破滅をもたらす凶鳥だったのだから。

「聞く必要はありません！　失礼します！」

スピアーノは強引に話を終わらせティアナの横を通り抜けようとする。

だが彼女はここで致命的な失敗をしてしまった。

「……たそうだな？」

「えっ？」

なぜ、ここで聞き返してしまったのだろう……と、スピアーノは己を悔いた。

ティアナが呟いたその一言が自身の命を刈り取る魔弾だと分かっていた筈なのに。

「物音が……聞こえたそうだな？」

「そうですよ……だからこそ我々はここにいるんでしょう。ラパンを探しに」

ああ、最早止められない。

次に出る言葉がスピアーノのか細くなった最後の火を消す……魔弾の風。

「そうだな。だが、聞こえるはずが無いんだよ。物音など」

「何で……ですか……私は確かに」

「いや、絶対に聞こえない。何故なら、私が張ったのは封鎖結界だけでなく……遮音結界もだからだ」

「えっ……そ、そんな」

火が今、風で消えた。

ティアナの放った言葉という名の魔弾はスピアーノの心に鋭く抉り

込む。

あの時、物音など聞こえないはずのあの状況で確かに物音を聞いたと証言したスピアーノ。

ティアナはそれを聞いた瞬間、己が勝利を確信した。

「私も初めは判らなかったさ。だが、既に内部に潜り込まれている。そう感じていた」

ティアナは言う。

自分にも誰がラパンか最初は分からなかったと。

「ロイス、十数人のガードマン、管理局員。皆が皆、怪しく思えるあの状況で、私に出来たことは罠を張ることだけだ。それとは分からないように囮まで用意してな」

「囮……あの封鎖結界ですか」

スピアーノ……いやラパンはそう小さく呟く。

戦闘が得意ではない自分が抵抗したところでどうにもならないと彼女は既に悟っている。

得意な転移を行うとしてもそんな隙を目の前の狩猟者は逃すはずも

ない。

もう、完全に詰みであった。

「そう……あの結界はお前を捕らえる為ではなく遮音結界を隠すために張ったものだ。消費は激しいがカートリッジを使えば十分は保つ」

今夜のティアナはいやに饒舌だ。

彼女の相棒ゼフィロスは、己が主人が相当ご機嫌なのだと黙して悟る。

それほどまでに、いつもは多くは語らないティアナの舌は良く回っていた。

「お前は何としても、逸早く外に出なければならない理由があった。私が結界を張り、誰も動くなと宣言した時。お前は相当に焦ったはずだ。何せ、あの時のお前に残された時間など保っておよそ数分と言ったところだからな」

ふと、ラパンは疑問に思う。

どうして、この目の前の少女は自分の隠されたる秘密をスバズバと当ててくるのだろうか。

保っておよそ数分。

魔法しか知らないミッド人には絶対に分からない事実の筈である。

なのにこの少女は……あの時の私の心の内も、どうやって厳重警備の中から「聖王の涙」を盗み出したのかも知っている気がした。

だから、純粋に聞いてみた。

私がどのように「聖王の涙」を盗んだのか？

何故、私が早く外に出たがったのか？

そして……お前は一体何者なのか？

「どうやって盗んだのか。それはお前がいた場所と持ち得る技術（スキル）、後は「聖王の涙」と月の位置を考えれば簡単だ」

ラパンたるスピアーノがあの時いた場所は天井にぽっかり開いた円形の天窓の直線上。

つまりは「聖王の涙」と天窓に挟まれた位置だった。

「お前が「聖王の涙」を盗むに用いた技術（スキル）は……忍法　影渡しの術。己の影の上にある物体を一時的にその影に引き込み手元に持ってくると言う、伊賀忍軍の秘術の一つだ」

それまで会場内を照らしていた照明が消えたことで生じた闇。
そして、対面からの月の光によって伸びたスピアーノの影。
それが「聖王の涙」まで届く事は十分に計算した上で分かっている事だった。
後は仕掛けにより急に照明が落ちた混乱の隙を突き、影の中に一瞬にして獲物を引き込んだのである。
だが、この忍術には一つ欠点が存在していた。
影の中に引き込んだ物体はそのまま保持出来るが、僅か十分程で影から出てきてしまうのだ。
そうなれば幾らスモークによって足下が隠されているとしても、その神秘的な虹の光によってすぐにばれるしまうだろう。
だからこそ、ラパンはすぐにでも外に出たかった。
物音を聞いたと嘘の報告をし、ラパンは既に外に逃げたと思わせて。
だが、ここで誤算が生じた。
そう、ティアナの張った封鎖結界である。
これにはさしものラパンも相当に焦った。
迂闊にも動く訳にもいかず、かといって時間が立てば己の身が危う

くなる。

そこでラパン逮捕に情熱を燃やすジェニー一尉を焚きつけることで事態の打開を図ったのだ。

奇しくもそれがティアナに正体を悟られる原因になると露とも思わずに。

「お前は一体……一体、何者だ！　何故……何故、私の切り札の忍術まで知っている！？」

「私が何者か。それは当のお前が良く知っているはずだ……「桜花絶景」石川五右衛門」

今度こそラパンは本当に驚愕した。

忍術についてはラパンの今までの犯行資料等を、かの無限書庫を駆使して調べれば……まあ、分からないとは言いきれない。

だが、今のは別だ。

それこそが誰にも悟られないはずのラパン最大の秘密なのだから。

しかし、五右衛門は一つ思い当たる。

目の前の少女も自分と同じなのでは……と。

「銃……傭兵……私の前世の名……ま、まさか……お前は！？」

五右衛門は目の前の少女とよく似た特徴を持つ人物を知っている。

それは前世の自分を悉く追いつめた戦国最強の鉄砲傭兵集団の若き長。

ラパンの反応を楽しんだティアナは普段は滅多にしない不適な笑みを浮かべ己が前世の名を言い放った。

「そう……久しいな五右衛門。お前の思った通り、私は……「煙鳥翔華」雑賀孫市だ」

第六話　真相（後書き）

ＦＩＡＴ５００は著者の愛車です。

なので、これからもちょくちょく出てくるかも

第七話　遭遇

因縁は遠く、時間も世界も越えた地で着けられる事となった。

覇王秀吉に異を唱え、彼の軍から盗みを働いた天下の大泥棒、「桜花絶景」石川五右衛門。

その秀吉に雇われていた傭兵集団雑賀衆の長、「煙鳥翔華」雑賀孫市。

その両者の対決は、下馬評通りと言うか当然ながら孫市に軍配が上がったのである。

「くっ……分かりました。あなたの勝ちです孫市。と、言うかいつも態と逃がしてもらっていた私があなたに勝てるはずがないでしょうが。お手上げですよお手上げ」

「ほう、殊勝だな。少しは抵抗するかと思ったが……やはり女々しいなお前」

ティアナはカートリッジをリロードし、ラパンにバインドをかける。

まあ、そんな事をしなくてもラパンは逃げるつもりは更々ないのだが一応の保険だ。

「女々しいも何も、今の私は女です」

「ん、何？　それは変装じゃないのか？」

「違います。この顔は素顔だし、スピアーノも本名だし、きちんと管理局員です。怪盗は趣味です」

それはティアナも疑問に思っていた事だった。

かつての五右衛門は紛う事なき男だったはずである。

ずっと女性局員に変装していると思っていたがどうやら違うようだ。

つまりはスピアーノ＝ラパンは堂々と正面から乗り込んできたという訳である。

どうりで書類に一切の不備がない訳だ……本人なのだから。

何でも生まれ変わった先は女の体で、女としての生活と教育を受けてきて、今は身も心も女なんだそうだ。

だが、男ではなく女好きらしい。

そんな所は変わらないなとティアナは思った。

それはさておき、

「さて、そろそろ「聖王の涙」を出してもらおうか」

「……分かりましたよ。あーあ、欲しかったなぁこれ」

スピアーノは局員用の汎用デバイスではなく懐から出した煙管型のストレージデバイスの格納領域から「聖王の涙」を取り出しティアナに投げ渡そうとする。

「一つ聞くが五右衛……いやスピアーノ。地面の下にいるのはお前の仲間か？」

「……はい？」

ティアナはすぐさま自身とスピアーノの丁度中間地点の地面に銃口を向け、自慢の魔弾を撃ち出す。

その瞬間、地面の下から人影が飛び出してきた。

「嘘っ！　何でばれたの！？」

それは水色の髪に体に完璧にフィットしたボディスーツを纏う少女だった。

ティアナは地面から飛び出し、今は宙にいる少女に瞬時に狙いを済ませ螺旋弾の三点射撃を放つ。

だが、命中したと思った刹那、遙か空から舞い降りた人影がティア

ナの魔弾を弾き飛ばした。

「ぐっ……なかなかの威力だ。油断したな、セイン」

「そーよぉーセインちゃん。見つかっちゃったらこっそり奪い取るという私のプランＡが出来ないじゃない」

「トーレ姉！！　クア姉！！」

夜はまだ終わりそうにない。

空から舞い降りたのは二人組。

長身で紫色の短髪の女と茶髪のお下げで眼鏡の女。

そのどちらも水色髪の少女と同じボディスーツを纏っている。

ティアナは今の攻防で相手の大体の実力を予測した。

名前は……会話から察するに水色髪の少女がセイン、短髪がトーレ姉、茶髪がクア姉と言った所か。

見たところ「聖王の涙」を狙っているがスピアーノの仲間ではなさ

そうだ……壁際で呆けている奴を見る限りは。

警戒をしつつも更に深く思考を巡らし、どうすれば最善かを考える。

そしてスピアーノにさっきと同じ質問を繰り返した。

「スピアーノ……もう一度聞くぞ。奴らはお前の仲間か？」

「ち、違いますっ！　私は単独ですって。それにいくら私が女好きだからだってあのボディスーツはちょっと……」

「そうか……ならば協力しろ。そうすれば逃がしてやらない事もない。あと、そんな事は聞いてない」

即座に否定するスピアーノにティアナは掛けていたバインドを解き、共闘を持ちかける。

スピアーノはしきりに頷き、ここに傭兵と泥棒の最強？タッグが完成した。

「あーもう。二人とも、あちらさんはやる気みたいですわよ。ここはプランBで行きますわ！　即ち、ボコして奪い取れ大作戦開始～。プランBのBは「ボコボコにして簀巻きでポイッ！」のBですわ～！！」

ちなみにプランAのAは「あれ？　無いぞ……何処いった？」のA

である。
それはともかく、どうやら相手も強行手段に出たようだ。
ここは逃げるかべきか、それとも迎え撃つべきか……選択肢は二つ。
「当然……迎え撃つ」
「あっ、やっぱりね……はぁ、逃げ出したい」
いきなりやる気の削がれる声を出したスピアーノを尻目にティアナは戦闘を開始した。
「ＩＳ『ライドインパルス』……はあぁあぁーーー！！」
そんな言葉と共に短髪の女――トーレのスピードが急激に増し、突撃を敢行してきた。
狭いながらも空間をフルに利用し、急速旋回や反転を駆使して肉薄してくる。
高速で移動し、的を絞り込ませない心算なのだろう。
だが、それが通用するのは並の射撃魔導師までだ。
今、此処にいるのは並などを遥かに超越した「凄腕」の銃使い（ガンスリンガー）。

「確かに速い……だが見えない訳ではない。そこだっ！！」

驚異的な動体視力によって動きを読み、すかさず予測射撃を行うティアナ。

放たれた弾丸はまるで吸い寄せられるかのようにトーレに命中する。

「くっ……やるな。なるほど、どうやら並の奴ではないようだ……ならばそれに合わせるまでの事」

（なっ！　更にスピードが上がった！？）

先ほどとは比較にならないほどのスピードで高速戦闘を仕掛けるトーレ。

さしものティアナも音速に迫るほどのスピードは捌ききれず何度か攻撃が掠ってしまう。

頬に流れる血を手で拭い、射殺すかのような目でトーレを睨む。

そして……

「「はぁぁあぁぁーーー！！」」

どちらからともなく再度激突した。

一方、スピアーノとは言うと。

「……もしかして弱い？」

セインに圧倒されていた。

「戦闘は得意じゃないんです。だから逃げたいって言ったのに……シクシク」

「なんか可哀想になってきた……ねえ、古の結晶渡してくれたら帰るから渡してくんない？」

敵からの魅力的な提案に一瞬頷きかけるが思いとどまるスピアーノ。

ここで渡したら天下の大泥棒の名に傷を付ける事になる。

それだけは絶対に嫌だったからだ。

昔、自分の前世が泥棒だと理解し始めた頃のスピアーノは非常にナーバスな状態だった。

しかし、それはそうだろう。

誰だって自分の前世が悪党だったと記憶付きで見せ付けられたら嫌になるに決まっている。

それは断片的な記憶だったが己が悪事を働く姿を夢に見るのは相当に苦痛であり、トラウマとなっていたほどだ。

スピアーノが管理局員を目指したのもこれが原因である。

だが、次々と開いていく記憶のピースについにスピアーノは気付いてしまった。

天下の大泥棒、石川五右衛門の真意。

圧政をしく豊臣から金や食料を盗み、貧しい人々に分け与える義賊の心に。

そうしてスピアーノは怪盗ラパンとなった。

まあ、初めて盗みを働いた時のスリルが忘れられず、ついつい余計なものまで盗むようになり、今では立派な財宝コレクターになったのはご愛嬌ではあるが。

「……渡せない……これは渡せない！　私が私であるためにも「聖王の涙」は絶対に渡せない！」

「そっか……じゃあ腕尽くで。……ん？　「聖王の涙」……？
レリックじゃなくて？」

なんか致命的な間違いに気付いたセインは確認のため、トーレの後方支援をしているクア姉ことクアットロに声を掛ける。

「ねぇ、クア姉ー。ちょっと聞いていい？」

「何なんですの……あの小娘。私のサポートを受けたトーレ姉様の動きに付いていってるなんて……本当に人間？　まさか私たちと同じ……」

全く聞こえてないようだ。

今度は心持ち大きな声で再び声を掛ける。

「クーアー姉ー。無視しないで聞いてー」

「何ですのセインちゃん？　私は今忙しいんですの。また後で……」

ようやくセインが呼んでる事に気付いたクアットロは不機嫌なのを隠さずにセインに応えた。

「こいつが持ってるの「聖王の涙」なんだって……クア姉が言ってたレリックじゃないの？」

「はぁ？　……「聖王の涙」？　あれ……おかしいですわね？　確かにラパンの予告状に古の結晶って」

「私が予告状に書いたのは古の玉石です。古の結晶とは書いてません」

答えは簡単に出てきた。

つまりは……

「てへっ、ごっめんなさ～い」

クアットロの早とちりである。

お互いに逝く所まで逝きそうなほどに戦い合っていたティアナとトーレ。

その二人を何とか宥めた両陣営は異常なまでに疲れ果てていた。

「やるな！　ティアナ！」

ガシッ

「お前こそな！　トーレ！」

その原因である二人は何故か友情を交わらせていた。
どうやら戦いから始まる友情も存在しているらしい。
それはさておき、

「つまりは、そこの眼鏡の勘違い。そういう訳か」

ティアナがクアットロを指差し、結論を述べる。

「め、眼鏡……んんっ、私はクアットロですわ。この度は申し訳ありませんでした……えーと、ティアナさん？」

それに対しクアットロは自己紹介をしつつも素直に謝罪した。
その姿にセインは凄まじく驚愕していたが気にしないでおきたい。

どうせ帰ったらお仕置きされるのだから。

「ティアナ・ランスター。フリーの傭兵だ。で、こっちは……」

「時空管理局本局所属のスピアーノ・マツダ准尉です。趣味で怪盗やってます」

「トーレだ」

「セインさんだよ。よろしくね二人とも」

お互いに自己紹介を済ませ、改めてクアットロが話を纏める。

「本当に申し訳なかったですわね、お二人さん。今日はここらでお暇させていただきます」

どうやらお別れのようだ。

長いこと戦っていたように感じるが、今の時刻は午前零時直前。

まだ二時間も経っていなかった。

「そうか。トーレ、お前と決着を着けられなかったのは残念だが仕方あるまい」

「こちらもだ。再び戦う日を楽しみにしているぞ、ティアナ」

なんかもう暑苦しい二人だった。

そして、何故かスピアーノはセインに頭を撫でられている。

「あっ、そうそう。レリックと呼ばれるロストロギアを見つけたら御一報下さいませ。我々が探しているものですわ」

「レリック？　ああ、分かった。連絡先は……」

ティアナはクアットロ達と連絡先を交換する後ろでスピアーノは何か考え込んでいる。

それが気になったクアットロはスピアーノに聞いてみた。

「どうかしたんですの？」

「いえ、レリックは確か第一級捜索指定のロストロギアだったはずです。それを探して貴方達は何をする心算なんですか？　事と次第によっては貴方達を……」

一応は管理局員であるスピアーノはクアットロに問い詰める。

だが、クアットロはにっこりと笑みを浮かべ、

「ご趣味の事……匿名で管理局にタレこみますわよ」

「調子こいてすいませんでしたぁ」

しっかりと脅しを掛けてきた。

スピアーノ、哀れなり。

今度こそ別れの時間になり、それではと空に浮かび飛び去っていくトーレとクアットロ。

じゃあねと地面に沈むように消えたセイン。

再び二人に戻ったティアナとスピアーノは路地裏から出て国立博物館に向けて歩き出した。

で、結局どうなったかというと……

「スピアーノ准尉、心配したんですよ。何処にいたのですか？　……

……それは！？」

国立博物館でスピアーノを待っていたジェニーは彼女の手にある「聖王の涙」に目を見開き驚愕する。

ジェニーは結局、自身でラパンを見つけることが出来ず、応援と検問の手配に博物館に戻ってきたのが外に出て一時間してからだった。

バラバラに捜索していた部下は連絡を受けて次々に戻ってきたがスピアーノだけが戻らず心配していたのである。

「「聖王の涙」……貴方が取り戻したのですね！　さすがは本局の魔導師。何も出来ないどこぞの傭兵とは違います！」

何も出来なかったのはお前達だろうとティアナは思うが言葉にせず無口を貫いた。

それをジェニー達は悔しくて何も言えないのだと勝手に決めつけ、本局魔導師の素晴らしさを延々と語っている。

「ジェニー一尉、違います。これは私が取り返したのではありません」

スピアーノの突然の告白にジェニー達は驚いた。

その内容は自身の手柄を否定する言葉だったからである。

「スピアーノ准尉、貴方でなければ一体誰が取り返したというのです？」

「ティアナさんです。私は後で合流しただけで何もやってません」

スピアーノの凛とした声に嘘ではないと悟ったジェニーはただ、そうですか、と呟きティアナに向き直る。

まあ、八割くらい嘘なのではあるが、言わないのが華であろう。

「「聖王の涙」を取り返して頂き、ありがとうございます。それで……ラパンは？」

急に態度が変わったジェニーにいぶかしむティアナだったが今は気にせず答えた。

「逃げたよ。私の仕事はそれを守ることだ。ラパンを捕まえることは仕事に含まれていない。それに……それは貴方達の仕事だろう。違いますか？」

「いえ、その通りです。その様な形で決着が付くなど私は納得しません。いつかきっと私の手でラパンを捕まえて見せます！！」

なんか自分の世界に入ったジェニーを尻目にティアナはそっとスピアーノの方に視線を向ける。

「あはっ、あははっ……はぁ」

そこには案の定、乾いた笑いを見せるスピアーノの姿があったそうな。

第七話　遭遇（後書き）

これで怪盗ラパン編は終了です。

次回はついにあのキャラが登場します。

お楽しみに！！

第八話　烏の弟子？（前書き）

ティアナのアジトに突撃する青い影……その正体は！？

ようやくキャラが集まってきた感じです。

第八話　烏の弟子？

「弟子にして下さい！！」

まだ幼さが残るものの力強い声を上げる青い髪の少女は「太陽の烏（ソル レイブン）」ことティアナ・ランスターを目の前にそんな事を宣言した。

此処は廃棄都市群に存在するティアナのアジト。

そのアジトの三階、応接室の床に直に正座し、両手を突き、額を擦り付けるように平伏するこの姿。

人、これを土下座という。

そう、いきなりアジトに入ってきた少女はティアナを前にするなり、その言葉と共に土下座をかましたのである。

この状況はいったい何なんだろうか。

された側のティアナとスピアーノは混乱の極致にあった。

「……とりあえず頭を上げろ」

何時までもこうされたら、まるで私がさせているようだ、と思ったティアナは少女に土下座を止めるよう言う。

だが、この少女はそれを別の意味で受け取ったようだった。

「ありがとうございます師匠！　私、がんばります！」

「スピアーノ……撃って良いか？」

頭を上げろというティアナの言葉を了承の意と捉えた少女は早速ティアナを師匠と呼ぶ。

勿論、ティアナはそんな事を許可した覚えは一切、微塵も、これぽっちも無い。

「そうですね、いいんじゃないですか」

なんか面倒だと感じたスピアーノはとりあえず許可を出した。

欠伸をしながらソファに寝そべるスピアーノの許しを得たことで早速デバイスを展開し、銃口を少女に向けるティアナ。

だが、ここでも少女はこの行為を別の意味で捉えた。

「あっ、修行ですね……分かります！」

何というポジティブシンキング！！

どうやら既に少女の中ではティアナは完全に師匠キャラとして登録されているようだった。

「違う！　ゼフィロス！！　１０８部隊のギンガ・ナカジマに連絡しろ！　今、すぐにだ！」

ティアナは相棒のゼフィロスに檄を飛ばす。

ティアナがすでにキレかかっていると感じたゼフィロスは素直に従うことにした。

『分かりました。なんて伝えます？』

「今すぐここに来て、お前の妹を連れて帰れ！　と、そう伝えろ！」

「あっ、ギン姉来るんだ！　久しぶりだなぁ」

この青い髪の少女の名前はスバル・ナカジマ。

管理局陸士１０８部隊部隊長ゲンヤ・ナカジマの娘であり、最近「蒼き流星」なんて厨二っぽい二つ名までついたギンガ・ナカジマの妹である。

事の始まりは二時間前に遡る。

あの国立博物館の一件から一ヶ月程経過したある日の事。

別の仕事が舞い込んだティアナは颯爽と出かけ、殲滅し、そして帰路に着いていた。

「物足りない。ゼフィロス、次の仕事は？」

最近、ティアナが戦闘狂に思えてきたゼフィロスはスケジュールを確認し、ティアナの質問に答えを返す。

『無いですよ、今ので最後です。あとは二週間後の管理局との合同演習まで何もありません。また休暇ですね』

そうか……と、明らかに落ち込むティアナにゼフィロスは休暇って普通は嬉しい物なのではと疑問に思ったが聞かない事にした。

この一に仕事、二に仕事、三四は訓練で、五に仕事という仕事人間のティアナに休暇は嬉しいですか？　と聞いたところで、絶対にＮＯ！　と返ってくるのが落ちである。

ちなみに前マスターのティーダは毎回休暇となれば嬉しさ全開で愛しの妹であるティアナに朝から構ってと突撃し、罵声と魔弾を喰ら

って寝込むという阿呆な休暇の過ごし方をしていた。

その為、ゼフィロスもそれが普通だと思っていたのだが、そんなものはティアナがマスターになった瞬間に崩れさったのは言うまでもない。

「また前回みたいに大きな仕事が来ればいいが……来なかった場合はどうするべきか」

アジトに到着し、ティアナは三階にある応接室に向けて足を運ぶ。

ティアナのアジトは一階が車庫、二階が武器庫とデバイス整備室、三階が書斎と応接室、四階が生活スペースとなっており、普段は応接室に居ることが多かった。

『これを機に何か前衛的な趣味を持ったらどうですか？　ショッピングとか』

「断る」

即答だった。

一分の隙間も無いほどに。

「私の心は常在戦場だ。そんなものに現を抜かしている暇はない」

時間的な暇ならこれから二週間もありますけどね、とゼフィロスは言いかけたが結局は飲み込んだ。

どう言っても今のティアナには無意味だからである。

そんな会話をしながらティアナは応接室の扉を開けると、

「遅かったですね。あんまり遅いんで寝てました。待ちくたびれましたよティアナさん」

スピアーノがソファに寝転がっていた。

ティアナはそれを確認するや否や、すぐさまヤタガラスを展開し魔弾を放つ。

その魔弾はスピアーノの顔を掠め壁に命中した。

「って、あぶなっ！　いきなり何するんですか！！　当たったら非道いじゃないですか！」

「ちっ、いきなり過ぎて手元が狂った。そこを動くな……今度はきっちり当ててやる」

「やめてください！　冗談です！　さっき来たばかりです！」

「お前がここにいること自体が私の撃つ理由だ。そもそもどうやって入った！？　侵入者殲滅用の罠が仕掛けてあっただろう？」

侵入者捕縛用ではなく殲滅用というのがミソだ。

危険度が段違いである。

「ふふん。私が誰だか忘れましたかティアナさん。私は天下の大泥棒、石川五右……いえ、怪盗ラパンですよ。この程度のトラップなど私に掛かればちょちょいのちょいです」

「ちっ、今度はもっと凶悪なのを作るか……それで何の用だ？」

「うっ……まあ、お願いがあって来たんですけど。その……驚かないで下さいね」

「何だ早く言え。そして帰れ」

情け容赦ないにも程がある。

もう少し優しくしてくれても……と、スピアーノは顔に出さずに思った。

まあ、無駄なのだが。

スピアーノはしばし逡巡していたが決心が付いたようで、凛とはっきりした声で告げた。

「雇って下さい」

「……は？」

「だから……雇って下さい」

ティアナは、何言ってるんだこいつ……という目をスピアーノに向けた。

それもそのはずスピアーノは歴とした管理局員？　のはずである。

「お前、管理局員だろう。仕事はどうした？」

「辞めました。ジェニーさんがあの一件以来、ウザいぐらいにあったやる気が超ウザいくらいにまで跳ね上がりましてね。奴はとんでもない物を盗んでいきました……私の心です！！　とか、休んでいる暇はないですよスピアーノ准尉、出動です！！　なんて言って、毎日毎日引っ張り回されて……怪盗する暇が全く無くなったんですよぉ」

ラパン逮捕に情熱を燃やすジェニー・ガーター一等空尉を更に燃え上がらせる結果になった先の国立博物館事件以来、スピアーノはほぼ毎日、ジェニーに連れ回され捜査を行っていた。

だが、残念ながらラパンは現れず［注：後ろにいます］、疲労だけ

が溜まり、ついにスピアーノは先日倒れてしまったのだ。
それに対し、情けないやら、あの傭兵を見習いなさいやら、過労で倒れている時にまで言われ、ついに我慢の限界を迎えたスピアーノは復帰後、即座にジェニーに辞職願いを叩きつけたのである。

「と、言うわけで雇って下さい。何でもしますから。私が怪盗するための隠れ蓑になって下さい」

「却下だ。帰れ」

情け容赦なか……なくはない。

そんな理由で雇ってくれと言われても断るのは当然の事である。

『すみませんがスピアーノさん。一つ聞きたいことがあります』

「はい？　何でしょう？」

『料理……できますか？』

さっきから会話に入ってこなかったゼフィロスが急にそんな事を言ってきた。

「はぁ、出来ますけど……」

『掃除、洗濯はどうですか？』

「出来ますよ。まだ１４ですけど一人暮らしですから」

ゼフィロスからの質問に是と答えるスピアーノ。

ティアナはいきなりの展開に付いて行けず困惑している。

「ゼフィロス、いきなり何を言いだ……」

『採用です』

「「……は？」」

二人の声が重なった。

どうやら妙な質問に困惑していたのはティアナだけではないようだ。

『ですから採用です。おめでとうございますスピアーノさん』

「あー、ありがとうございま……す？」

「おいゼフィロス……何を勝手に決めている！？　それに何だ、今の質問は」

『何って……毎日毎日、固形の栄養ブロックか戦闘糧食（レーション）しか食べず、

洗濯物は貯めに貯めてから丸ごとクリーニングに出し、掃除は目に付いた大きなゴミしか取らないマスターに対しての当てつけですが……何か？』

ゼフィロスはティアナの相棒を自負するインテリジェントデバイスである。

その彼がマスターであるティアナの体の心配をして何がいけないと言うのだろうか。

そもそも、まだ兄ティーダが存命だった頃はティアナも一応は家事をやっていたのだ。

だが、その兄が亡くなって、一人身になった途端にこのようになってしまった。

ゼフィロスは昔から散々、生活を改めるよう言ってきたのだが、現在に至るまでティアナは全く聞く耳を持たなかった。

そこで雇って欲しいというスピアーノに対し家事が出来るかと質問し、これがティアナの為だと思い採用を決定したのである。

「当てつけって……必要な栄養はきちんと取ってる。洗濯だってプロにやって貰えば良いし、掃除は最低限汚れが見えなければ良いだろう。だから却下だ却下」

ティアナの反撃。

だが言ってる事は年頃の女性にしてはあまりにも酷い内容だ。
そんな反撃で家事が出来る就職希望者を目の前にしたゼフィロスが納得するはずも無く、

『こういうマスターですので宜しくお願いしますね。スピアーノさん』

「はい、分かりました」

「おい！　私の話を聞け！！」

徹底的にティアナの意見が無視された結果、渋々ながらティアナもスピアーノの採用を認めたのだった。

そしてその後、スピアーノが作ったランチを食べ、これから如何するかをコーヒーでも飲みながら話そうとしたときに、

『えっ……マ、マスター！！　接触センサーに反応あり！！　エリアサーチ発動……反応、真っ直ぐこっちに向かってきます！！』

事態は急転換を迎えた。

ティアナのアジトに向かって高速で近づいてくる謎の反応。

それが敵以外の何なのであろうか。
ティアナはすぐさまバリアジャケットを展開し、戦闘体勢を整える。
スピアーノはすぐさま窓を開き、飛んで逃げようとした。
計5発の魔弾がスピアーノの頬を掠めたので結局止めたが。
そんな事をしている内に反応はアジトの下まで辿り着いていた。

「ゼフィロス、罠を作動させろ！」

『罠は全て、そこのスピアーノさんに解除されてしまって動きません！』

「さて、帰りますか……じゃあ、また明日にでも」

「ええい、今日は厄日か！？　って、逃がすかスピアーノ！　お前は囮になれ！　その間に私はお前ごと敵を撃つ！」

「嫌ですよそんなの！　あっ、やめてっ、撃たないで……冗談、冗談ですよ」

『皆さん……反応、もうここの扉の前まで来てますよ』

そんな言葉が聞こえた直後、扉は勢いよく開かれ、

「弟子にしてください！！」

そんな言葉と共に青い影がかなりの低姿勢で入ってきた。

「「……は？」」

「弟子にしてください！！」

「「いや、あの……」」

「お願いします。弟子にしてください！！」

こうしてようやく冒頭に繋がった。

第八話　烏の弟子？（後書き）

スバル登場の回でした。

次回は小狸が出ます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2926w/

凡人に誇り高き烏が入りました

2011年10月6日13時13分発行